

八尾市文化財調査報告31  
平成6年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ

1995. 3

八尾市教育委員会



八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告Ⅰ正誤表

頁・行	誤	正
P 14・L 28	(67, 70)	(69, 70)
P 24・L 4	・・含めて16点の	・・含めて15点の
P 25・L 2	(794 ~756 )	(749 ~757 )
P 55・L 27	・・ところ19点中、	・・ところ13点中、
P 55・L 27	誤 (I類4点、II類2点、III類1点、IV類1点) ↓ 正 (I類5点、II類2点、IV類1点)	

形態	須恵器				土師器								製造土器 種類	件数			
	長縦		短縦		長縦				短縦等								
	杯	盤	甕	壺	罐	瓶	甌	盂	鉢	碗	羽釜	甌	壺	罐			
丸底	6 (5)	3 (2)	13 (1)	5 (0)	27 (8)	14 (11)	1 (0)	8 (8)	19 (1)	2 (2)	26 (9)	11 (2)	2 (2)	1 (0)	84 (35)	77 (17)	158 (60)
盤				2 (0)	2 (0)				1 (0)		2 (0)				3 (0)	8 (0)	13 (0)

・○は破片を含む。

表1 北調査区出土土器器種別計数表

(P56・訂正)

# はじめに

高安山をはじめとする美しい山並みのふもとに位置する八尾市は、生駒山地を隔てて東は大和に接し、西は河内潟を望む所に位置し、古代から交通の要所であり、豊かな穏りの地として発達してきました。

近年新聞紙上を賑わすような数々の発掘成果がそのことを物語っていると言えましょう。調査により得られた多くの資料はこれからを生きる歴史として、将来に渡り、引き継いでいくべき貴重な遺産であります。

本書は平成6年度に行った遺構確認調査の成果をまとめたものであります。本書が歴史研究の基礎資料として利用され、八尾市の貴重な埋蔵文化財を理解していただく一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたり、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

八尾市教育委員会  
教育長 西谷信次

## 例　　言

1. 本書は、平成6年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として計画し、八尾市内で実施した造構確認調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会文化財課（課長　溝川博由）が事業者に協力を求めて実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財課技師米田敏幸、瀬 斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、米田、瀬、吉田が執筆・編集を行い、文責は文末に記した。

## 本文目次

1. 萱振遺跡（93-635）の調査	1
2. 萱振遺跡（94-156）の調査	3
3. 木の木遺跡（94-54）の調査	5
4. 久宝寺遺跡（94-65）の調査	7
5. 久宝寺遺跡（94-334）の調査	9
6. 成法寺遺跡（93-476）の調査	11
7. 成法寺遺跡（93-521）の調査	20
8. 成法寺遺跡（94-189）の調査	27
9. 成法寺遺跡（94-300）の調査	29
10. 高安古墳群（94-360）の調査	35
11. 東郷遺跡（94-144）の調査	37
12. 東郷遺跡（94-182）の調査	39
13. 東郷遺跡（94-303）の調査	41
14. 中田遺跡（93-403）の調査	43
15. 中田遺跡（94-14）の調査	45
16. 中田遺跡（94-339）の調査	47
17. 東弓削遺跡（94-484）の調査	49
18. 八尾寺内町遺跡（94-86）の調査	61
19. 八尾南遺跡（94-125）の調査	63
20. 八尾南遺跡（94-433）の調査	66
21. 山賀遺跡（94-396）の調査	68
22. 山賀遺跡（94-401）の調査	71

# 図版目次

図版1 成法寺遺跡(93-521)	墨書き人面土器出土状況
成法寺遺跡(93-476)	第1調査区溝SD1(東から)
図版2 成法寺遺跡(93-476)	第2調査区第1遺構面(東から)
	第2遺構面溝SD2(東から)
図版3 成法寺遺跡(94-300)	第6調査区断面
図版4 成法寺遺跡(94-300)	第6調査区遺物出土状況
	第1調査区遺構検出状況
図版5 高安古墳群(94-360)	第3調査区断面
	第1調査区全景
図版6 東郷遺跡(94-182)	第2調査区遺構検出状況
	第1調査区断面
図版7 中田遺跡(94-339)	第2調査区遺構検出状況
	第1調査区断面
図版8 八尾南遺跡(94-125)	第1調査区遺物出土状況
図版9 八尾南遺跡(94-433)	第3調査区断面
図版10 山賀遺跡(94-396)	第3調査区遺構検出状況
	第1調査区断面
図版11 山賀遺跡(94-401)	第2調査区断面
	第1調査区遺構検出状況
図版12 成法寺遺跡(93-476)	SX1出土遺物
図版13 成法寺遺跡(93-476)	SX1・SE1・SK2出土遺物
	SD2出土遺物
図版14 成法寺遺跡(93-521)	墨書き人面土器
	出土遺物
図版15 成法寺遺跡(94-300)	出土遺物
図版16 東郷遺跡(94-303) (94-182)	出土遺物
図版17 東弓削遺跡(94-484)	出土遺物
	須恵器、土師器
図版18 東弓削遺跡(94-484)	出土遺物
	製塙土器
	軒丸瓦
図版19 山賀遺跡(94-396)	出土遺物
八尾南遺跡(94-125)	出土遺物

## 1. 萱振遺跡（93-635）の調査

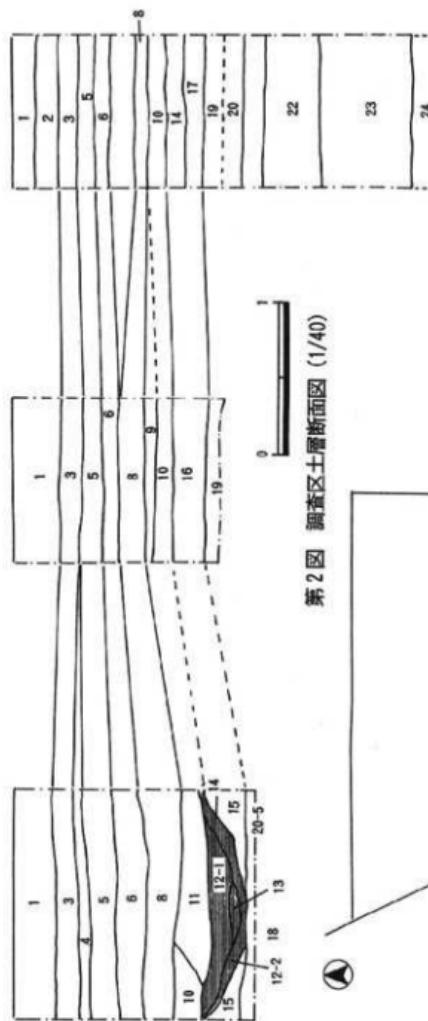
1. 調査地 萩振町1丁目7-5、7-6、8-1
2. 調査期間 平成6年4月4日
3. 調査方法 施工予定地の西側と東側に約2m四方の調査区を、中央部に約1m四方の調査区を設定し、重機と人力を併用して掘削を行なった。
4. 調査概要 西側調査区では地表下1.54m前後まで掘削したところ、地表下1.2mの灰白褐色粘土層上面で古墳時代中期（布留式中～新段階）の土器が多く含む溝状の造構を確認した。この溝状造構は幅1.5m、深さは0.24mを測る。埋土は3層に分かれ、上層と下層は褐色斑暗淡灰色粘土層であり、下層は炭を密に含んでいた。この間の中層は淡黄灰色炭混粘土層である。東側調査区と中央調査区ではこれと対応する可能性のある面をそれぞれ地表下1.0mで確認した。東側調査区では地表下2.7mまで掘削を行なったところ、シルト層・有機物混粘土層の下の地表下2.0m以下で、灰白色粗砂層を確認した。

高木しらべ

(吉田)



第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査区土層断面図 (1/40)

1	粘土
2	茶褐色斑状白色砂質土層
3	灰茶白色砂質土層
4	灰灰褐色砂質土層
5	灰茶褐色砂質土層
6	灰茶褐色砂質土層
7	褐色斑状白色砂質土層
8	褐黃色粘質土層
9	灰白褐色粘土層
10	褐色斑状白色粘沙質土層
11	茶褐色斑状白色粘沙質土層
12-1	褐色斑状白色粘沙質土層
12-2	褐色斑状白色粘沙質土層
13	淡黃色斑状シルト質粘土層
14	褐色斑状白色粘土層
15	褐色斑状白色粘性シルト土層
16	淡灰褐色斑状白色粘性シルト土層
17	褐色斑状白色粘性シルト土層
18	褐色斑状白色粘性シルト土層
19	淡灰褐色斑状シルト土層
20	灰褐色粘性シルト土層
21	淡灰褐色粘性シルト土層
22	褐色粘性粘土層
23	灰白色粘沙質土層
24	灰白色粘沙質土層



第3図 調査区設定図 (1/500)

## 2. 葦振遺跡（94-156）の調査

1. 調査地 桂町1丁目54-1
2. 調査期間 平成6年6月20日
3. 調査方法 造構、遺物の有無を確認する目的で、建築物計画予定地内の南北2箇所に3m四方の調査区を設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施した。その後写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 南側の第1調査区では地表下1.7m以下、旧地表から0.4m以下に土師器片・須恵器片を含む層厚約20cmの暗灰褐色砂混じり粘質土層を確認した。その下のシルト細砂層を抜くと地表下2.5mで黒灰色粘土に達する。この粘土直上の砂層には、弥生式土器の細片が2点混入していた。
- つぎに北側の第2調査区でも地表下1.8m前後で層厚約8cmの暗灰褐色砂混じり粘質土層を確認したが、北端に深さ約8cmの落ち込みがみられ、ここに若干の土師器片が含まれる状況であった。この層以下には、砂層の厚い堆積がみられた。



第4図 調査位置図

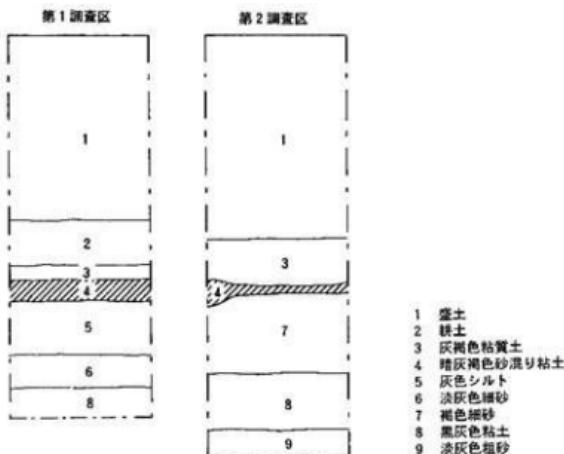
## 5. 調査結果

今回確認した包含層には、奈良時代の須恵器片が含まれており、この時期を前後するものとみられるが、遺物の磨滅状況から集落域から外れた部分にあたっており、顕著な遺構はみられないものと思われる。当該地の北方及び西方には同時期の遺構が顕著にみられることから、薺振遺跡の拡がりを考える上で示唆的な資料になると思われる。

(米田)



第5図 調査区設定図 (1/1000)



第6図 土層断面図 (1/40)

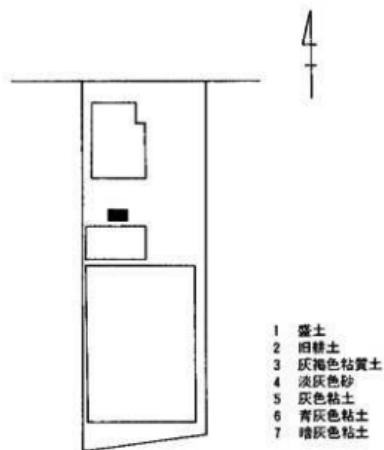
### 3. 木の本遺跡（94-54）の調査

1. 調査地 南木の本5丁目12の一部
2. 調査期間 平成6年6月3日
3. 調査方法 埋設物予定箇所で、 $2 \times 3$ mの調査区を設定し、機械による掘削を実施した後、断面観察と遺物採集を実施した。
4. 調査概要 調査区で地表下3.3mまで掘削を実施したところ地表下3m以下、旧地表下1.5m以下に層厚約3.0cmの古式土師器を含む暗灰色粘土層を確認した。包含層の遺物密度は高いものであるが、調査区の範囲の制約から調査坑内で作業ができず、遺物包含層の掘削土より遺物を採集するのみで遺構の有無を検証することができなかった。
5. 調査結果 この調査では、布留式を中心とする包含層の存在を確認した。当該地の西150m、北100mの地点では、布留式土器や韓式系土器を含む遺物包含層や遺構の存在が明らかになっており、また、東方300mのところでも布留式段階の遺構群が確認されている。この調査で確認した遺物包含層もこれ

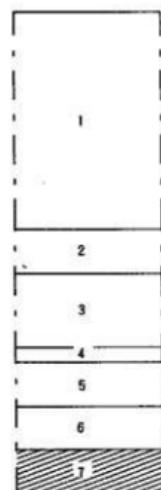


第7図 調査地周辺図 (1/5000)

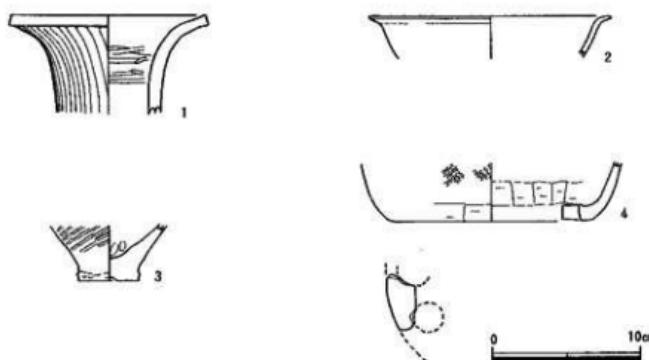
らの造構群に対応する土層であると想定されることから、両者を繋ぐ貴重な資料であるといえる。この調査は、木の木遺跡の古墳時代集落の規模を想定するうえで参考になるものと思われる。  
(米田)



第8図 調査区設定図 (1/1000)



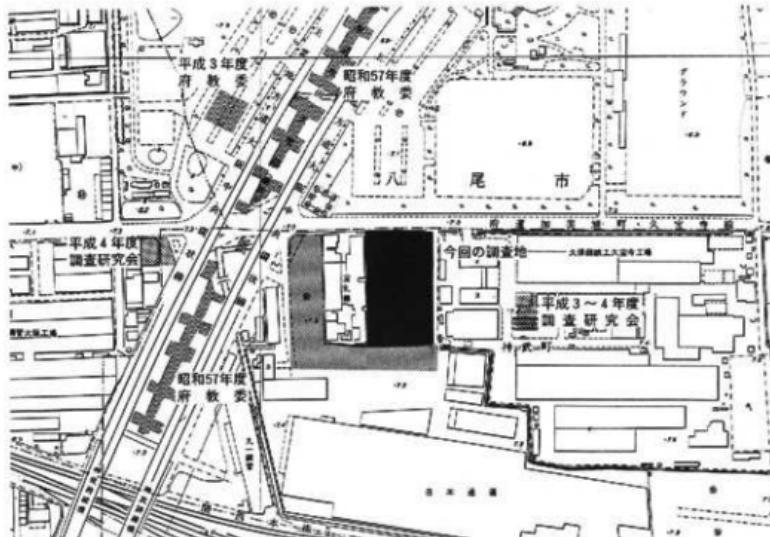
第9図 土層断面図 (1/40)



第10図 出土遺物実測図 (1/4)

#### 4. 久宝寺遺跡（94-65）の調査

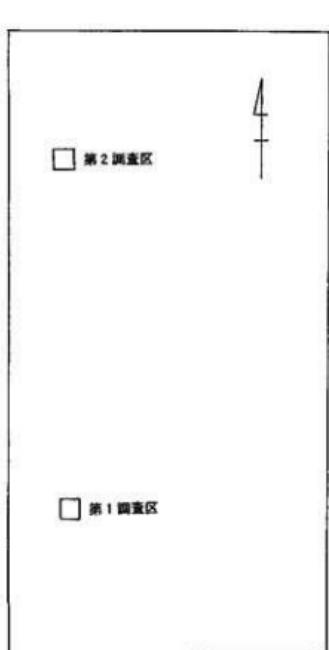
1. 調査地 神武町143, 144, 145, 146, 146-2, 170, 172, 173, 174, 175
2. 調査期間 平成6年5月10日
3. 調査方法 造構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画敷地内の南北2箇所に3m四方の調査区を設定し、機械による掘削のち、手作業により包含層の掘削及び断面精査を実施した。その後写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 南側の第1調査区では、盛土、旧耕土を除去し、淡灰色シルト、灰褐色シルトを掘り下げるところ褐色粘土層に達する。この層には須恵器の細片が若干含まれているが、この層の直下地表下1.85m以下に庄内式の古式土師器を包含する灰色粘土層の存在を確認できた。この層の層厚は20~30cmあり、その直下の淡灰色シルトをベースとしておりここに造構の存在が予測できる。以下は厚い砂の堆積層となる。
- 北側の第2調査区でも第1調査区同様の層順で土層の堆積がみられたが、遺物の包含は全く確認できなかった。



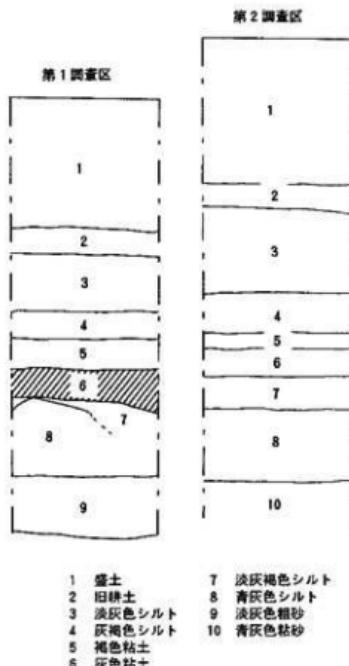
第11図 調査地周辺図 (1/5000)

5. 調査結果　　南側の第1調査区で確認した遺物包含層は、隣接地及び近畿自動車道で検出されている弥生時代～古墳時代の包含層と遺構群の層位に対応しており、久宝寺遺跡の拡がりの一角に当たっているものと思われる。しかし敷地北半部については、遺物の包含がみられず、昭和57年度に敷地北東部で実施した試掘でも同様の状況であったことから遺構の存在状況が希薄であるものと判断できる。したがって敷地南半部については、事業の実施にあたって記録保存等の措置が望まれる。

(米田)



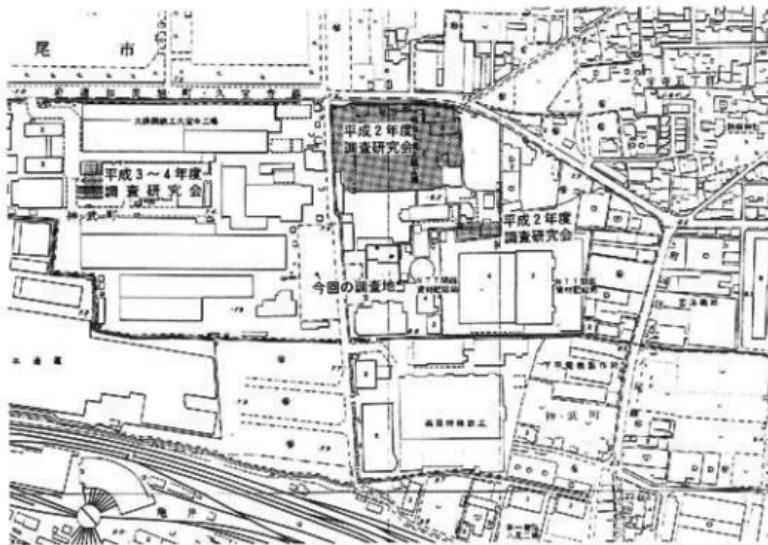
第12図　調査区設定図 (1/1000)



第13図　土層断面図 (1/40)

## 5. 久宝寺遺跡（94-334）の調査

1. 調査地 神武町17他
2. 調査期間 平成6年9月8日・10月17日
3. 調査方法 建築物予定地範囲において $2 \times 2$ mの調査区を4箇所設定した。各調査区においては、機械により盛土を除去したのち機械及び手作業による調査を行い、遺構と遺物包含層の確認及び遺物の収拾を実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 建築敷地東南端の第1調査区においては、地表下2.4mまで掘削を実施した。旧耕土・床土以下は粘土が厚く堆積しているが、2.4m付近の厚さ20cmを測る黒灰色砂混じり粘土層より、古式土師器の高环杯部・壺口縁等の破片が若干含まれていることを確認した。そこで、第2～4各調査区においてその対応層以下まで掘り下げを行ったが、砂と粘土が交互に堆積しているのみで遺物の出土を見ず、対応する包含層の存在を確認することができなかつた。

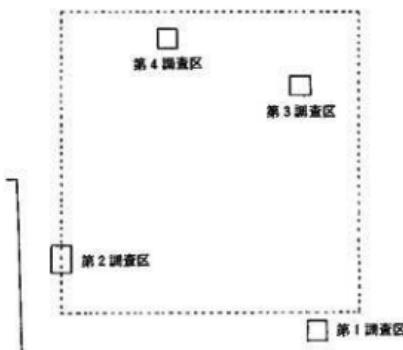


第14図 調査地周辺図 (1/5000)

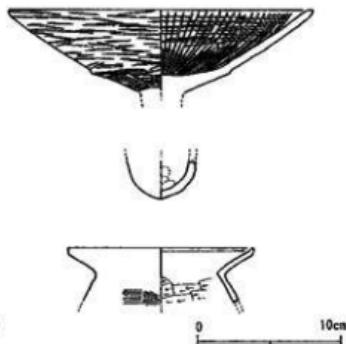
## 5. 調査結果

第1調査区でみられた古式土師器の包含層の深度では、当該敷地の近隣においては整穴住居跡等が検出されているが、他の調査区においては、河川堆積を示す土層を確認しており、包含状況の希薄さから該当する遺構が存在する可能性は無いものと推定される。

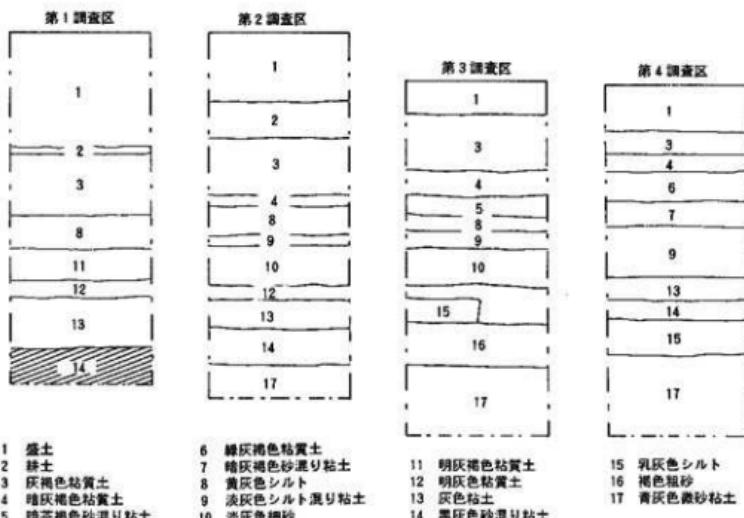
(米田)



第15図 調査区設定図 (1/500)



第16図 出土遺物実測図 (1/4)



第17図 土層断面図 (1/40)

## 6. 成法寺遺跡（93-476）の調査

1. 調査地 南本町3丁目31-2
2. 調査期間 平成6年12月6、7日
3. 調査方法 事業計画地の南側に約3.4 m×3 mの第1調査区を、北側に約3 m×3 mの第2調査区を設定し、地表下2.4 m～2.6 mまで掘削を行い遺構の検出に努めた。
4. 基本層序 調査地は現在幼稚園の運動場として利用されており、約0.4 m前後の盛土がされている。

第1調査区－地表下約1 mの暗灰色粘砂上面が第1遺構面となり、下部層の地表下1.2 m前後の淡黄灰色シルト上面が第2遺構面となる。以下茶灰色～褐色粗砂混粘砂、褐色粗砂が堆積しており、粗砂層は湧水層である。

第2調査区－地表下0.55～0.6 mの淡褐色砂質土上面で土器溜まりを検出する。また地表下0.75 m前後の淡灰色砂質土上面で土坑、ピットを確認したことからこれを第1遺構面とした。この淡灰色粘質土と下部の灰色粘質土は



第18図 調査地周辺図 (1/5000)

遺物包含層になり、地表下1.35mの黄灰色粗砂質土上面が第2造構面となる。1.55m以下はやはり褐色砂層を認めた。

5. 検出造構 第1調査区-第1造構面では溝(SD1)を検出する。溝はT字状を呈しており、深さ約0.2mで淡黄灰色シルト混茶灰色粘砂を埋

土とする溝内から多量の土師器小皿が出土している。他に瓦器、青磁、須恵器片、瓦、三足釜、土師質羽釜などが含まれている。土師小皿は溝全体に見られるが、とくに3か所に集中している状態が確認でき、あわせて120枚以上出土しており、瓦器碗が破片で18点しか出土していないのは第2調査区と比較すると時期差との関連があるとしてもその状況は大きく異なっている。

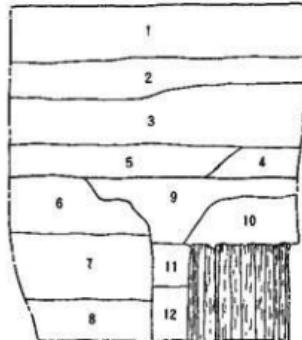
個体として捉えられる数値を並べると、集積1では土師器皿49点、瓦器6点、他に青磁片も確認できた。集積2では土師器皿13点。集積3では土師器皿19点、瓦器4点の他に土師質羽釜片などがみられた。

集積1~3の土師器皿はへそ皿と呼ばれるもので、時間的な隔たりはないと思われる。このようなことからこれらの遺物は數度にわけてその都度一括に投機されたものと考えられる。



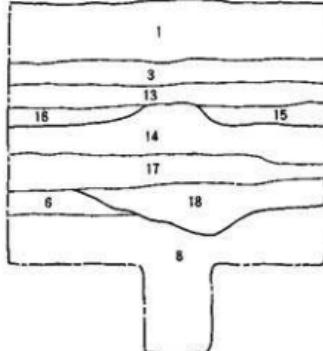
第19図 調査区設定図 (1/1200)

第1調査区 西壁



- 1 表土
- 2 茶灰色粘砂
- 3 緑褐色砂質土
- 4 緑灰色粘砂
- 5 淡黄灰色シルト混茶灰色粘砂
- 6 淡黄灰色シルト混粘砂
- 7 茶灰色~褐色粗砂混粘質土
- 8 褐色粗砂
- 9 茶灰色粘砂 (井戸埋土)
- 10 墓灰色砂混粘砂 (井戸埋土)
- 11 黄褐色粘砂
- 12 褐色粗砂質土
- 13 淡褐色砂質土
- 14 淡灰色砂質土
- 15 暗灰色粘砂 (SK-1埋土)

第2調査区 南壁



- 1 淡黄灰色シルト混粘砂
- 2 茶灰色~褐色粗砂混粘質土
- 3 褐色粗砂
- 4 黄褐色粘砂
- 5 黄褐色粗砂質土
- 6 淡褐色砂質土
- 7 黑灰色砂混粘砂 (SD-2埋土)
- 8 黑灰色粘砂 (SK-2埋土)
- 9 黄褐色粘砂
- 10 黄褐色粗砂質土
- 11 黄褐色砂混粘質土
- 12 黄褐色粗砂質土
- 13 黑灰色砂混粘砂 (SD-2埋土)
- 14 黑灰色粘砂 (SK-1埋土)
- 15 黑灰色粘砂 (SK-2埋土)
- 16 墓灰色茶色粘質土 (SK-2埋土)
- 17 黄褐色粗砂質土
- 18 黑灰色砂混粘砂 (SD-2埋土)

第20図 土層断面図 (1/40)

第2遺構面では井戸（SE1）を検出した。堀方は1.55m以上の不整円形で、遺構面より0.47m下に桶状のものを設置して井戸側としていた。井戸側は深さ0.8mまで確認したが以下は湧水等により断念した。

井戸の廃棄した後の埋土には羽釜、瓦器、土師器の碎片に混じって練り鉢、白磁片が含まれていた。井戸内部からは瓦器（高台部分の碎片）、瓦片、土師器片とともに桃の種がみられた。井戸堀方からも瓦器、瓦、灰釉陶器、羽釜、土師器等の碎片が出土している。

出土遺物がいずれも碎片で井戸の使用時期は明確にはできないが、井戸内部出土の瓦器碗から12世紀末～13世紀前半とみられる。

第2調査区-第1遺構面では土坑3基（SK1～3）とピット2個（SP1・2）、そして土器溜まり（SX1）を検出した。

（SK1）不定形（検出長径1.54m×短径1.12m、深さ0.17m）

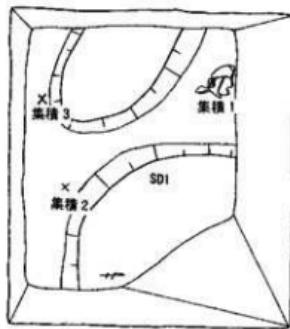
埋土-暗灰色粘砂

（SK2）長円形（検出長径1.6m×短径0.6m以上、深さ0.2m）

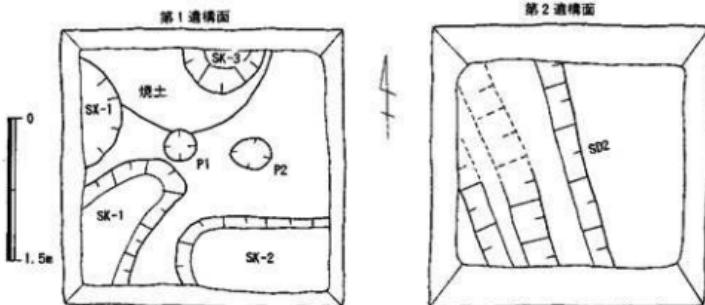
埋土-暗灰茶色粘砂 瓦器碗3個体以上、羽釜片、土師小皿、

黒色土器片が出土している。瓦器碗から13世紀後半頃か。

（SK3）円形（検出長径0.86m×短径0.45m以上、深さ0.23m）



第21図 第1調査区 第1遺構面 (1/60)



第22図 第2調査区平面図 (1/60)

埋土－灰色砂質土で、長径 2 m × 短径 0.9 m の不整円形状に拡がる炭化物が 0.05～0.1 m の厚さで堆積しており、それを除去した後に検出した。出土遺物は土師小皿、瓦器碗、須恵器片、三足羽釜脚部片などである。

(S P 1) 円形 (径約 0.35m、深さ 0.15m) 埋土－灰色粘砂

(S P 2) 円形 (径 0.45m × 0.33m、深さ 0.07m) 埋土－淡灰色砂質土

(S X 1) 円形 (検出長径 1.14m × 短径 0.44m 以上、深さ 0.5 m 以上)

埋土－淡灰色砂質土 他の遺構より 15cm 上面から切り込まれている。土坑と思われるがその性格が不明なため上器溜まりとした。調査区外に拡がるため完掘はしていないが、100 個体以上の瓦器碗、20 枚の瓦器小皿、三足羽釜 3 個体、土師皿 9 枚、他に土師質羽釜片などがぎっしり詰まった状態であった。時期は瓦器碗から 13 世紀中葉～後葉に比定できる。

第 2 遺構面では南東から北西方向に伸びる溝 (SD 2) を検出した。検出長 2.24m、巾 1.35m を測る。埋土は灰黒色砂粒混粘砂で、黒色土器 A 類の椀型土器片、B 類の皿等が出土しており、11 世紀前半に位置付けられる。

6. 出土遺物 第 1 調査区の溝では瓦、瓦器碗、須恵器片、三足羽釜片などが出土しているが微量であり、図化できるものはやはり土師皿が大半を占める。溝内土器集積 1 (1~28) 土器集積 2 (29~40)、土器集積 3 (41~48) と集積以外の溝内よりの出土 (49~66) はいずれも土師皿である。土師皿は淡黄橙色を呈し、手づくね成形である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部外面には指頭圧痕が顕著に残る。底部は凸状でいわゆるヘソ皿が多い。集積 1 の土師皿の口径は 8 ~ 9.4 cm で平均 8.3 cm、集積 2 は口径 8.4 ~ 9.1 cm で平均 8.7 cm、集積 3 は 7.8 ~ 8.2 cm で平均 8 cm を測る。また集積以外の溝出土の土師皿は口径 8.2 ~ 10 cm で平均 8.8 cm を測る。このように各集積間の遺物は口径が異なり、大きさを揃えて使用していたことがわかる。これらの土師皿は 14 世紀前半～中葉の頃とみられる。

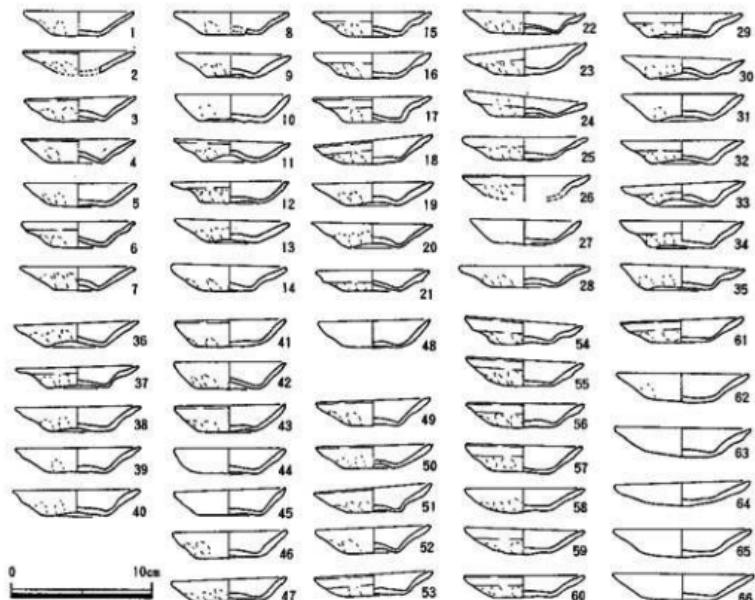
(67・68) は井戸に関するもので、(67) は井戸の埋土より出土した土師質羽釜で、しもぶくれ気味の球形体部から「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部は内側に突出する。器壁は薄く、全体にナデ調整を行う。菅原氏分類の大和 12 型とみられ、16 世紀後半に位置づけられる。(68) は井戸内部より出土した瓦器碗底部で碎片であるが、12 世紀後半に比定できよう。

(67・70) の瓦器碗は第 2 調査区の土坑 (SK 2) から出土したものである。(69) は口径 12.6 cm、器高 3.2 cm、外面には指頭痕、内面のヘラミガキは粗である。高台は円盤状の薄い粘土を貼りつけて高台としている。いずれも 13 世紀中葉～後葉とみられる。

(71 ~ 101) の遺物は土器溜まり (S X 1) 出土遺物である。瓦器碗 (71 ~ 94) は口径 14.6 ~ 15.9 cm、器高 4 ~ 4.8 cm を測る。(76, 77, 79) を除いて見込み部は平行線状暗文を粗に施す。外

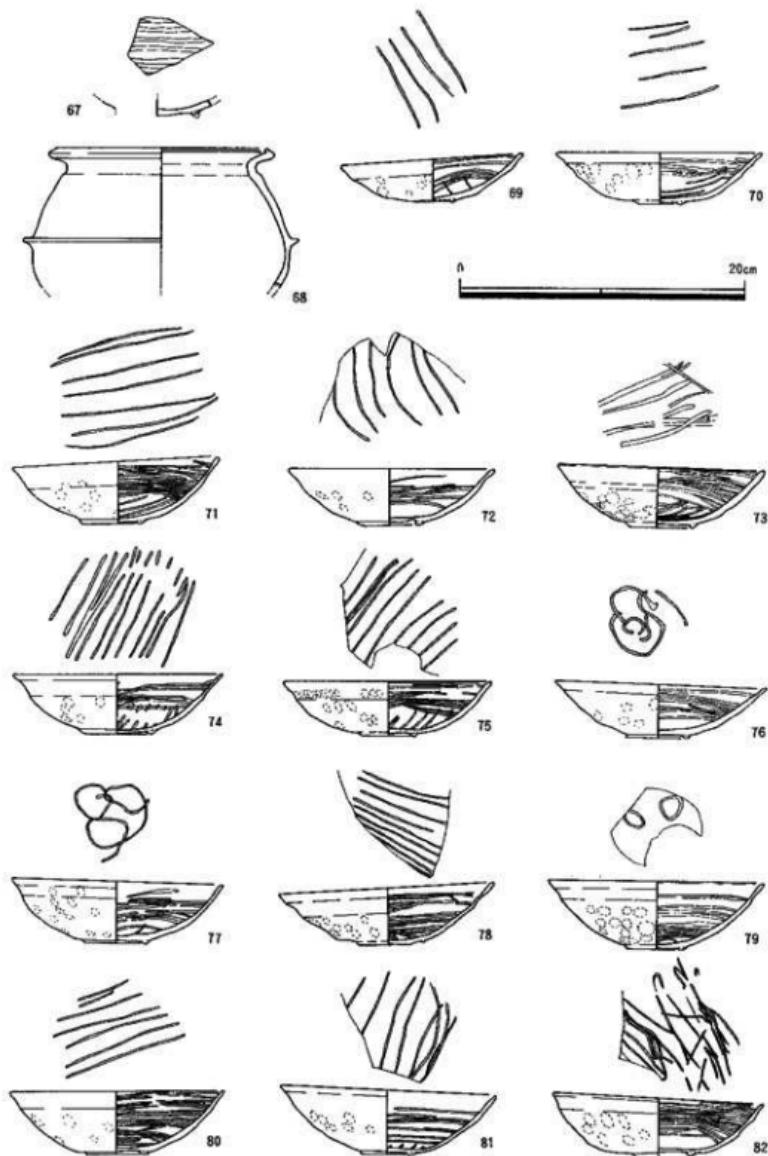
面は指頭圧痕が遺存し、口縁部は横ナデを行う。高台は低く、紐状にした粘土を張りつけるだけで成形していない。13世紀後半頃とみられる。瓦器小皿(95~101)は口径8.2~9cm、器高1.7~1.9cm。土師質小皿(102~111)は口径7.8~8.8cm、器高1~1.4cm。口縁端部はつまみ上げるものと丸くおさめるものがあり、底部が偏平なものも存在する。大皿(112~114)は口径13~13.6cm、器高2.4~2.9cm。また鉢に近いものもある(114・116)。他に土師質羽釜(117)は森島氏分類によるA型式か。瓦質三足(118・119)も出土している。土器窯の時期は瓦器碗から13世紀中葉から後葉に比定できる。

(120~130)は第2遺構面の溝(S D 2)出土遺物である。(120・121)は黒色土器A類の碗型土器とみられるが、(120)は内外面とも細かいヘラミガキを行い、外面は淡赤褐色、内面は淡灰白色の色調を呈すが素地の色が遺存する。(121)は(120)と比べると内外面とも大きなヘラミガキを施す。色調は内面は黒色、外面は淡灰茶色。(122・123)は碗型土器の高台で内面はナデ痕跡とともにミガキがみられ、内面は淡灰白色、外面は淡赤褐色。(124)は黒色土器B類の皿型土器で、細かいミガキを全面に施す。土師皿(125~127)は「て」字状口縁をもち、端部をつまみあげるものと外反し端部が丸いものがある。(128)は瓦器小皿であるが混入の可能性が高い。甕(129・130)は短く直立し平坦面をもつもの、外反し傾斜する面をもつものがあり、

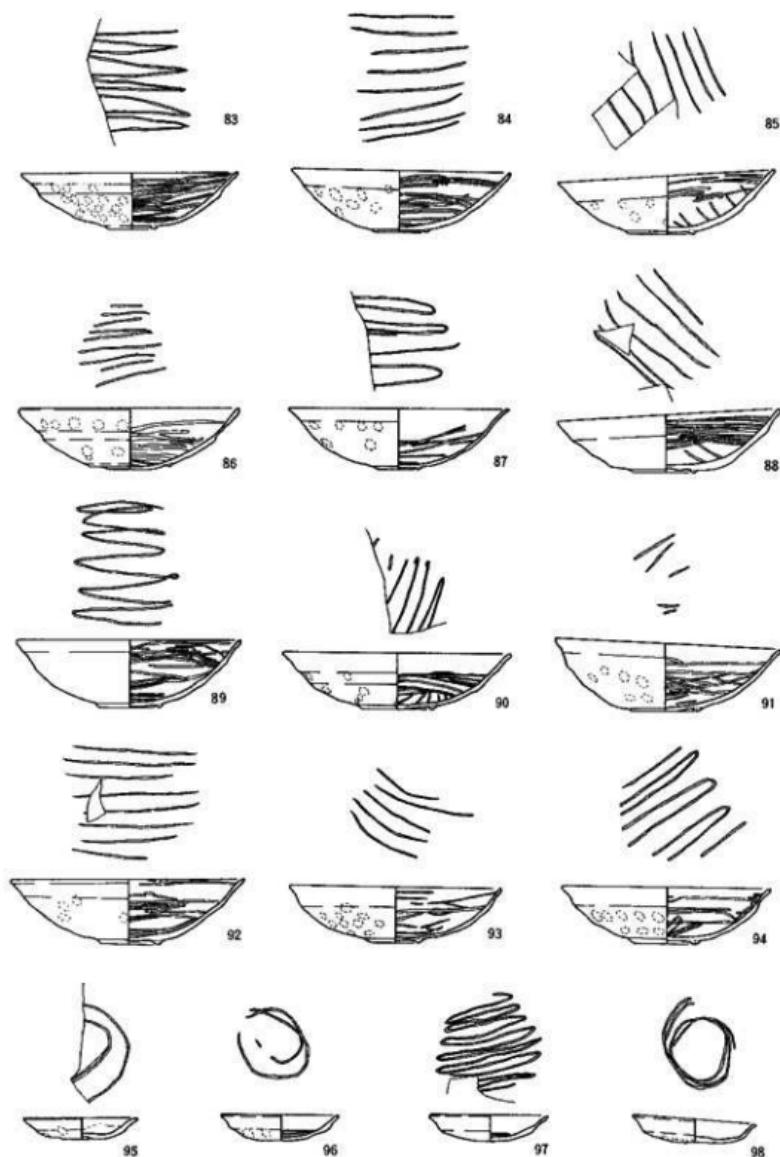


第23図 溝(S D 1)出土遺物実測図(1/4) 集積1[1~28] 集積2[29~40]

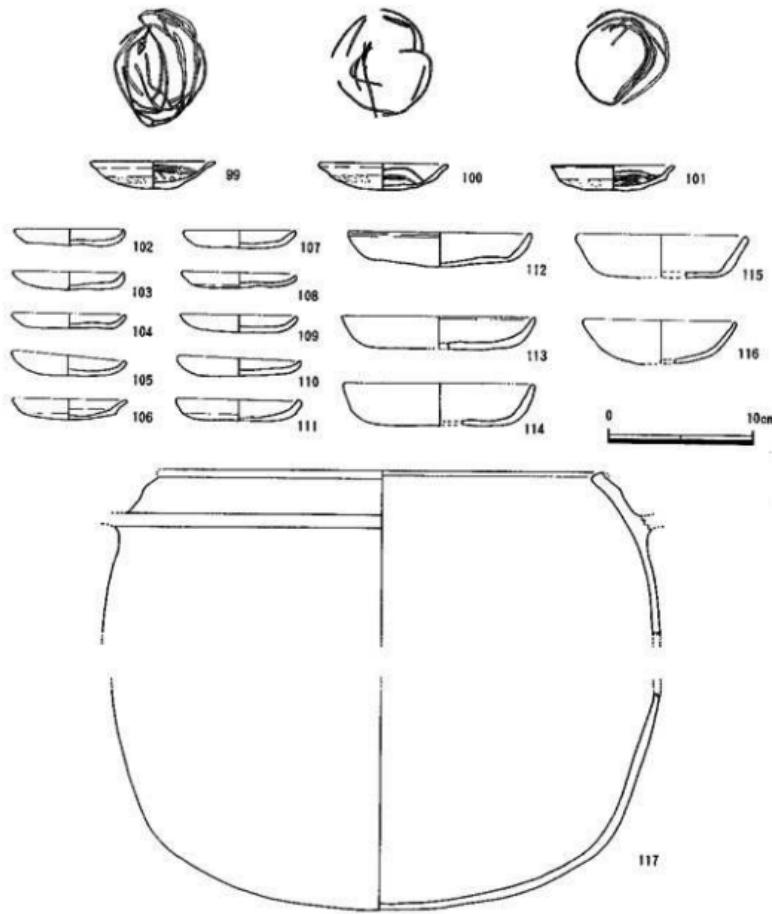
集積3[41~48] その他[49~66]



第24図 出土遺物実測図 (1/4) S E 1 [67・68] S K 2 [69・70]  
S X 1 [71~82]

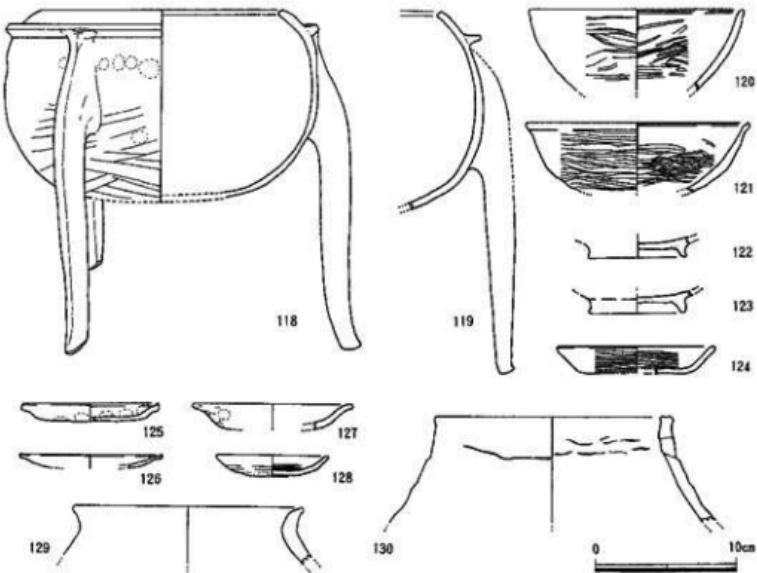


第25図 SX 1出土遺物実測図 (1/4)



第26図 S X 1 出土遺物実測図 (1/4)

いずれも雑なナデを行う。この溝（S D 2）の土器は黒色土器A類の楕型土器とB類の皿型土器が共伴しており、「て」字状口縁の土師皿もやや形がくずれ始めていることから10世紀後葉～11世紀初頭に位置づけられよう。



第27図 出土遺物実測図 (1/4) SX1 (118・119), SD2 (120~130)

**7.まとめ** 今回の調査は小さな面積にもかかわらず非常に多くの遺物が出土した。最後に各遺構の時期を出土遺物からまとめておく。最も古い時期の遺構は第2調査区の溝(SD2)で、10世紀後葉～11世紀初頭である。次に第1調査区の井戸(SE1)で12世紀末～13世紀初頭。これに少し遅れて土器窯(SX1)が13世紀中葉に形成され、さらに少し時間を経て土杭(SK2)が掘削されてようである。これらに前後して他の土坑やピット(SK1, SK3, SP1, SP2)も構築される。そして最後に14世紀前半に第1調査区の溝(SD1)に大量に土師皿が投棄される。ただし井戸(SE1)は埋土から時期が下る可能性があるが、この地域は鎌倉時代を通じて遺構が形成されており、その成り立ちには注意を要する。  
(沿)

**8.参考文献** 尾上実「南河内の瓦器窯」『藤沢一夫先生古稀記念古文化財論叢』1983  
森島康雄「畿内瓦器窯の併行関係と歴年代」『大和の中世土器II』1992  
「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究VI』1990  
菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983  
川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究VI』  
1990

## 7. 成法寺遺跡（93-521）の調査

### 1. 調査地

高美町1丁目73・74

### 2. 調査期間

平成6年1月12日

### 3. 調査方法

事業計画地の東西に約3m×3mの調査区を設定し、各々第1・2調査区とした。また第1調査区で検出した遺構面の抜がりを確認するため、両者の間に2m×2mの第3調査区を設定した。

### 4. 基本層序

調査地はこれまで耕作地として利用されていたが、最近盛土が行われたようである。

以下、第2・3調査区では灰褐色粘質土がみられ、この層中には土師器片・埴輪片とともに少量はあるが瓦器片を含む。地表下1.55m前後の黄灰色～暗淡灰色シルト層には埴輪片・土師器片・弥生土器等を含み、第2調査区では上面で土師器壺底部がみられたが、盛土の際削平をうけており、本来の遺構面かどうかは不明である。地表下2.45mまではシルト～粘質シルトが堆積し、この層以下では暗青灰色粘質土を確認する。



第28図 調査地周辺図 (1/5000)

第1調査区では盛土直下である地表下1.05mの明褐色砂質土に弥生時代後期から奈良時代の遺物が含まれており、地表下1.2mの暗褐色粘質土上面で井戸を検出した。調査区の東側では地表下1.3mの灰褐色粘土が弥生土器を包藏し、そしてこの下部層は褐色細砂の湧水層であった。

#### 5. 検出遺構

ここでは第1調査区で検出

第29図 調査区設定図(1/800)

した井戸について述べていくが、本調査は造構確認調査であり、遺構は完掘しなかった。そのため後に御八尾市文化財調査研究会によって行われた調査(注1)結果を一部引用して以下記述する。詳しくは報告書を参照されたい。

堀方は長辺2.8m×短辺2.2mの不定形を呈し、深さ約0.6mを測る。井戸枠には曲物を使用しており、隅丸長方形曲物2段が遺存していた。上段は2重になっており、円形の曲物が入れ子になってやや突出した形になっている。曲物の堀方は0.8mの隅丸方形で、上段と下段の隙間には2cm大の小石を充填しており、上段の周囲には水を呼び込むために幅5~15cm、長さ20~30cm、厚さ1cmの板を周囲に配していた。

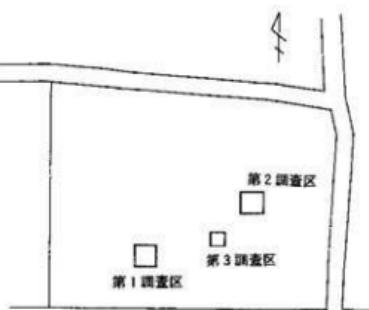
#### 6. 出土遺物

前述のように遺構確認調査のため井戸の堀方は掘削しておらず、内部についても検出面から0.3mを掘削したのみであるが、墨書き人面土器(1)、土師器甕(2)、9世紀初頭の須恵器杯B(3)、表面の磨耗した6世紀の器台(4)、偏平な石2点(5,6)、桃の種2個などが出土している。

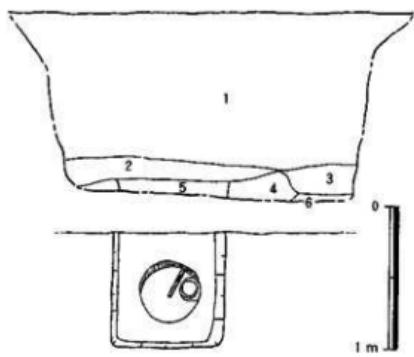
第1調査区の井戸上面の2層明褐色砂質土では甕口縁、器台裾部(7)、無蓋壺脚部(8)、弥生土器片、土師器片等が出土しており、整地層と考えられまた6世紀初頭の遺物も含まれている。

また断面図には載せていないが南側では地表下1.05mに灰褐色粘土、灰色砂混粘土(併せて層厚0.26m)がみられ弥生後期の土器片が出土している。

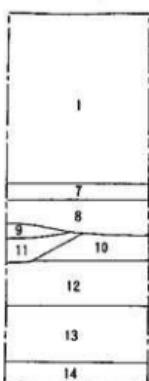
第2調査区では地表下1.3mの8層灰褐色粘質土で土師器片や弥生土器片の他にタガが潰れ、ナナメハケを施すV期の埴輪片(9)も出土している。また10層上面では壺片と思われる底部が置かれた状態で出土していた。



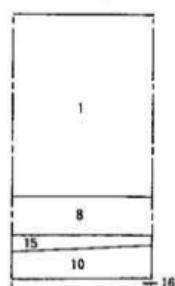
第1調査区、北壁断面



第2調査区



第3調査区



1 表土～礫土	6 喧嘩灰色粘土	11 明灰色シルト	16 暗青灰色シルト
2 明褐色砂質土	7 灰黒色粘砂	12 暗灰色シルト	
3 淡灰褐色粘砂	8 灰褐色粘質土	13 喧嘩灰色粘質シルト	
4 暗褐色粘質土	9 暗灰色粘質土	14 喧嘩灰色粘土	
5 暗灰色粘質土	10 黄灰色シルト	15 暗灰色シルト	

第30図 土層断面及び井戸平面図(1/40)

第3調査区でも地表下1.25m前後の8層より土師器片とともにタガが突出しておあり、ヨコハケを施しているIV期とみられる埴輪(II)が出土している。

**7. 墨書き人面土器** ここでは井戸より出土した墨書き人面土器について記述していく。土器は井戸の上段内に入れ子になっていた円形の曲物より出土し、土師質の壺で口径15.8cm、器高12.6cmを測る。内外面調整は体部～底部はナデで、外面には指頭痕が残る。口縁部は横ナデを施している。そして口縁から体部にかけて大小2種類の顔が交互に4面描かれている。アとウ・イとエが同一の顔で、各々が対面となっている。

この土器の時期であるが、前述のように共伴遺物としては須恵器杯B(2)、土師器壺3)、器台(4)、偏平な石(5, 6)、桃の種2個がある。特に須恵器杯Bは高台が外に寄り、体部が開く形態となっていることから8世紀末～9世紀初頭に比定でき、人面土器もその時期とみられる。

人面土器は特に水に関わった祭祀に使用されることが多いとされ、今回は井戸の祭祀に使用されたものとみられる。これは井戸出土遺物で唯一の完形品であり、また桃の種と偏平な石が共伴していることからも考えられよう。そしてその祭祀とは井戸枠の最上段から出土していることからおそらく井戸を廃絶することに対するものであることを推定できる。

次に描かれた顔の表現についてみていく。アとウは口髭、あご鬚、そしてほお鬚の顎面を描いている。アは口髭が短く、あご鬚が濃い。ウは口髭が横に長く、ほお鬚が濃い。がいすれも

髪か顔の輪郭となっている。これに対してイとエは髪を生やしてはおらず、あご部分の輪郭は表現されていない。また頭部分には墨でに黒色に着色されていること等がア・ウとの大きな相違点であろう。

4面の顔の表現の特徴としては目・鼻・口等が非常に丁寧に描かれている点にある。通常人面土器に描かれた顔は稚拙なものが多い。しかし、今回の人面上器は仏面に通じるような表現がみられる。いくつか例挙してみよう。1)眉が半円形で耳まで達する長いものである。2)小鼻を凸形で表し、鼻梁を眉に近いところから通して聰明な印象を与えている。3)目頭は尖っており、上瞼はゆるやかな曲線を描いている。4)上唇は山字形で、両唇の側面はやや上向きに尖っている。5)耳は長く、一般にいわれる福耳状を呈す。6)特にイとエの頭は盛り上がっている上に着色しており、釈迦の大相32相の頂髻相のように見える。これらが仏を表現しようした筆法として捉えることができるならば、特にイとエは彫刻ではあるが、「東大寺の誕生釈迦如来立像」(8世紀) や「唐招提寺の釈迦如来像」(8世紀) に近似した印象を受ける。

またアとウは当時の一般的な人物の面相を表している可能性もある。正倉院の人物戯書「大論」の人物はやはり顔面で頭には幞頭をしている。本人面上器の人物も頭が盛り上がっているようにみえ、これを幞頭をしている様を表現しているものとすれば当時の人の顔を描いたものと考えることもできる。

上述のように捉えることができるならば、アとウは祭祀を催した人物を描き、イとエは仏を描いて仏の力によって、祭祀を行って貰おうとしたことを仮説として導くことも可能である。

あるいはこれまでに指摘されているように人面土器の顔と正倉院の「布作面」との関係でみるとならばアとウは男顔を、イとエは女顔を描いたものと考えられる。正倉院には現在32面の布作面が残されている。このうち4号面といわれているものが唯一女顔を表したものである。4号面は眉が赤く彩色され、頭髪を黒く塗っている。4号面以外のものは頭部分は描かれていません。しかし、口髭、あご鬚、ほお骨の鬚面を描いている。このようにアとウは布作面の男顔に比定できる。そしてイとエは頭部が着色されていること、やや垂れ気味の目を持つこと、アとウよりも小さく描かれていること等から女顔に比定することができ、この人面上器の人物は男女の描き分けをしたものと想像することもできよう。

このように人面上器に描かれた顔についての解釈が定まっていないのはその使用方法が解明されていないうえに、今回のような顔の輪郭から頭部までを描いたものが少なく、稚拙なものが多く、また記号文を配するもの、人面数が1~8面と定まっていないこと等が挙げられる。(注4)  
なお、8~9世紀の人面土器で顔の輪郭をもち頭部まで描いているものは秋田県秋田城、宮城  
(注5)県沢辺遺跡、山形県猿田遺跡、大阪府枚方市藤田山遺跡、同堺市南花田遺跡、同長原遺跡、同  
(注6)松原市大津道周辺遺跡、岡山県国司迫遺跡、奈良平城京右京八条一坊・S D3715・東堀河、

（注15）京都府長岡京 S D16202 などから出土している。このうち南花田遺跡出土のものは頭部から足までの体全体を描いている。また平城京 S D3715では鬼面に似た顔もみることができる。

最後に八尾市内出土の墨書人面土器の集成表を挙げておく。

出土遺跡	個 数	出土遺構	備 考	文 献
萱振遺跡	4点	自然流路	2面3点、記号文1点、墨書き土器多数出土	(1)
東郷遺跡	1点	不 明	2面 下水道工事中に発見	(2)
弓削遺跡	1点	井 戸	2面、銅鏡が共伴している	(3)
小阪合遺跡	4点	河 川	いずれも破片。他に墨書き土器あり	(4)
成法寺遺跡	4点	埋没河川	4面1点、不整円を描いたもの1点、皿1点	(5)
〃	1点	井 戸	4面1点、桃の種・偏平な石が共伴している	本報告

第1表 八尾市内出土墨書き人面土器集成

第1表のように八尾市内では今回出土したものを含めて16点の墨書き人面土器が出土している。また成法寺遺跡ではこれ以外に大阪府教育委員会の平成6年度の調査で3面1点、記号文1点の計2点の人面土器が出土している。  
（注16）

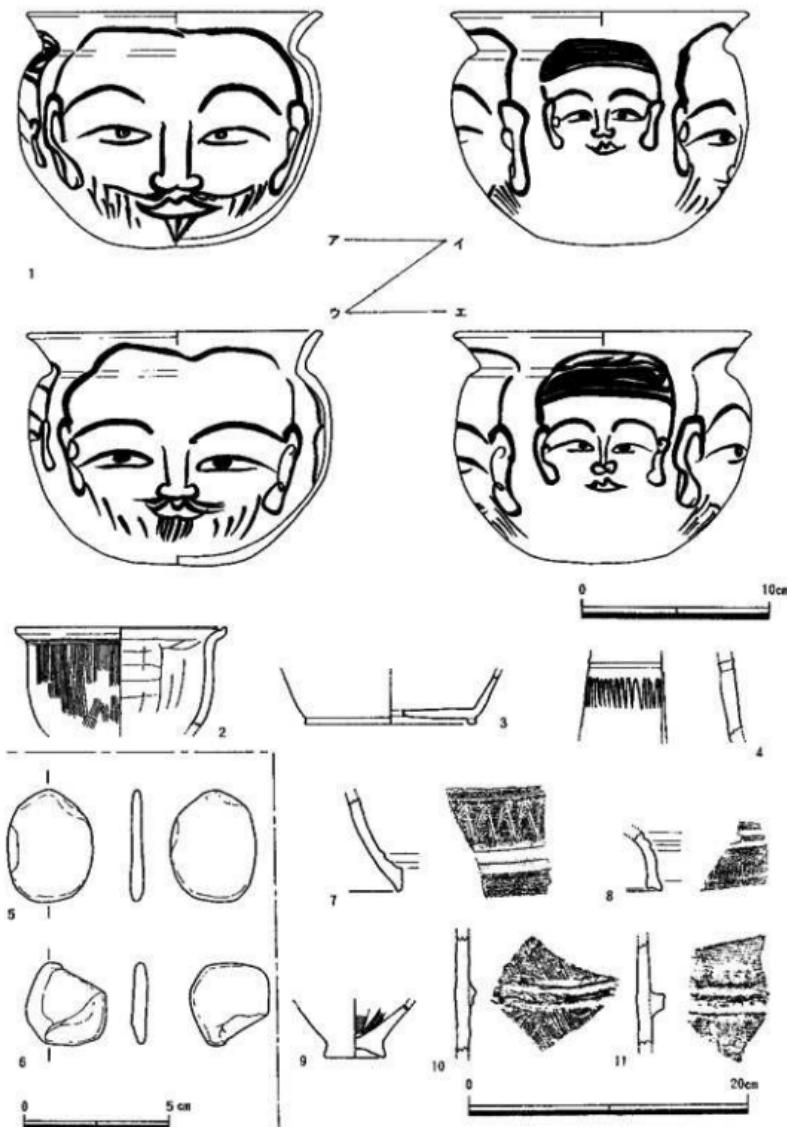
平城京あるいは長岡京、平安京では墨書き人面土器専用の土器として土師器壺B、Cが製作され、製作・調整技法、形態、法量に高い齊一性があるとされている。しかし八尾市内では今回出土した土器も含めて、公表されている実測図、写真で見る限りではいずれも南河内産の土師器壺を使用している。『続日本記』の神護景雲三年（769）に「詔、以由義宮為西京・」とう記事があり、八尾市域には西京とされる由義宮があったとされている。その場所はともかくとして、「西京」と呼ばれるものが存在しておりながら平城・長岡・平安京で使用された墨書き人面土器専用に製作された土師器壺B・Cが出土していないはどうしてであろうか。近年市内での人面土器の出土量増加から同時期の施設が存在したこと、また人面土器を使用する祭祀が持ち込まれていることも確かである。このようなことから人面土器が出土する地域、あるいは土師器壺B・Cの出土が「由義宮」を比定する要素となる可能性がある。

8.まとめ 以上のことから当調査地には弥生時代後半、古墳時代（5世紀中頃～6世紀前半）、奈良時代末葉～平安時代初頭（8世紀末葉～9世紀初頭）の3時期の遺構があることが推定される。特に埴輪片の出土は周辺に古墳のあったことを示唆するものとして重要であろう。また人面土器の見つかった井戸と同時期の集落は当調査地の西500mで検出されており、その関連が今後の課題である。また今回出土した人面土器は優れた技法をもって顔面を描こうとしている。『聖徳太子伝暦』には賣秦画師、河内画師、権画師の三家が定められたと記されており、河内において画師の家系があつたことが伺われる。

現存している作品では東大寺大仏殿の大仏蓮弁線刻画の下絵の制作《天平勝宝（794～756）》に河内画師次万呂が画工司の長上として携わっている。人面土器を河内画師に直結することはできないが、絵画に関連する要素が河内にあったことは人面土器をみてもわかる。このように多くの謎を持つ墨書き面上器の存在は大きな問題を解くうえで重要な鍵となるであろう。（道）

## 9. 参考文献

- (注1) 岛八尾市文化財研究会『島八尾市文化財調査研究会報告42』1994
  - (注2) 正倉院事務所『正倉院の絵画』昭和43年
  - (注3) "
  - (注4) 田中勝弘「墨書き人面土器について」『考古学雑誌』第58巻第4号
  - (注5) "
  - (注6) 山形県教育委員会『依田遺跡第2次発掘調査報告書』1984
  - (注7) 柏原市歴史資料館『顔・顔・顔／人面墨描土器の世界』1989
  - (注8) 大阪府教育委員会『南花田遺跡発掘調査概要I』1985
  - (注9) (注7)と同じ
  - (注10) (注7)と同じ
  - (注11) (注4)と同じ
  - (注12) 大和郡山市教育委員会『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984
  - (注13) 奈良国立文化財研究所『平城京展』1989
  - (注14) 奈良市教育委員会『平城京東堀川一左京九条三坊の発掘調査』1983
  - (注15) 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書第27集』1989
  - (注16) 大阪府教育委員会、岩瀬透氏に御教示いただいた。
  - (注17) 上村和直「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢II』1992
- 人面土器の主要参考文献
- 金子裕之「平安京と祭場」『国立歴史民族博物館研究報告』第7集 1985
  - 同氏編『律令期祭祀遺物集成』1988
  - 田中勝弘「墨書き人面土器について」『考古学雑誌』第58巻第4号 1973
- 八尾市内人面土器集成 文献
- (1)柏原市歴史資料館『顔・顔・顔／人面墨描土器の世界』1989年度図録
  - (2)八尾市教育委員会『八尾市史・文化財編』1977
  - (3)八尾市文化財調査研究会『昭和59年度事業概要報告』1985  
八尾市歴史民族資料館『八尾を掘る－10年の歩み－』1992
  - (4)八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡（昭和57年度第1次調査）』1987
  - (5)大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要・VII』1994



第31図 出土遺物実測図 墓書人面土器[1](1/3)、偏平石[5・6](1/2)  
他の遺物[2~4, 7~11](1/4)

## 8. 成法寺遺跡（94-189）の調査

1. 調査地 高美町1丁目29-1
2. 調査期間 平成6年7月15日
3. 調査方法 建築物予定地範囲において $3 \times 3$ mの調査区を南北2箇所設定し、機械により盛土を除去したのち機械及び手作業による調査を行い、遺構及び遺物包含層の確認及び遺物の取り上げを実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 敷地北側の第1調査区においては、盛土、旧耕土、灰褐色粘土を除去したところ、地表下1.3m付近の厚さ4.5cmに及ぶ暗黄～灰褐色粘土層で、古式土師器を包含しているのを確認した。  
さらに、敷地南側の第2調査区で掘削を開始したところ、盛土直下の地表下1.2m付近より掘り込んだ溝状の大きな落ち込みを検出した。この溝は幅2m以上、深さ1m以上の大きなものと推定される。溝内からは、多数の古式土師器が出土した。



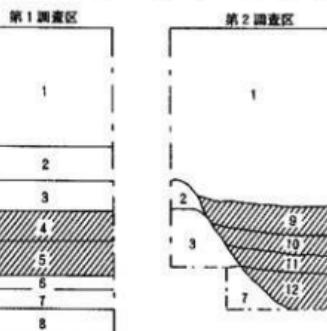
第32図 調査地周辺図 (1/5000)

## 5. 調査結果

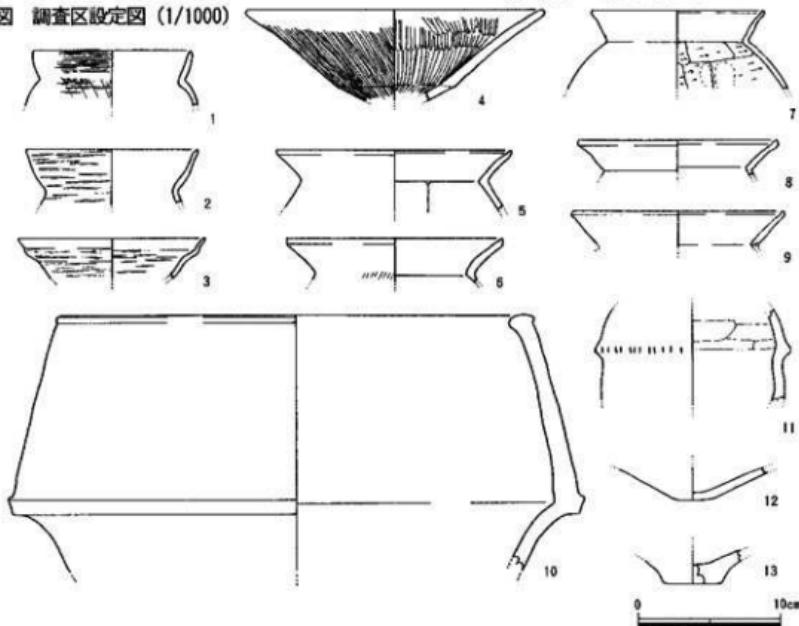
本調査で検出した造構と遺物包含層は、いずれも古墳時代前期に属しており、敷地前面の府道拡幅時をはじめとする付近の調査で検出されている成法寺遺跡の造構群とも関連性をもつものと思われる。この調査では成法寺遺跡の造構群の拡がりを確認できた点で一つの成果を得る事ができた。（米田）



第33図 調査区設定図 (1/1000)



第34図 土層断面図 (1/40)



第35図 遺物実測図 (1/4)

## 9. 成法寺遺跡（94-300）の調査

1. 調査地 南本町1丁目1-1, 1-3の一部, 1-4, 1-10, 1-11
2. 調査期間 平成6年8月24～26日
3. 調査方法 建築物予定地範囲において3×3mの調査区を7箇所設定し、機械により盛土を除去したのち2×2mの範囲で機械及び手作業による掘削作業を行い遺構及び遺物包含層の確認及び遺物の取り上げを実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 第1調査区においては、地表下2.3m以下に弥生時代中期～後期の0.6m以上の深さの河道跡を検出した。  
第2調査区においては、地表下2.4m以下にある層厚40cm以上の黒灰色粗砂混じり粘土層が弥生時代中期の遺物包含層であることを確認した。  
第3調査区においては、地表下2.6m以下の黒灰色粗砂混じり粘土層が層厚50cm以上の弥生時代中期の濃密な遺物包含層であることを確認した。  
第4調査区においては、地表下2.3m以下の黒灰色砂混じり粘土層が層厚



第36図 調査地周辺図 (1/5000)

4.0 cmの弥生時代中期の遺物包含層であるのを確認した。

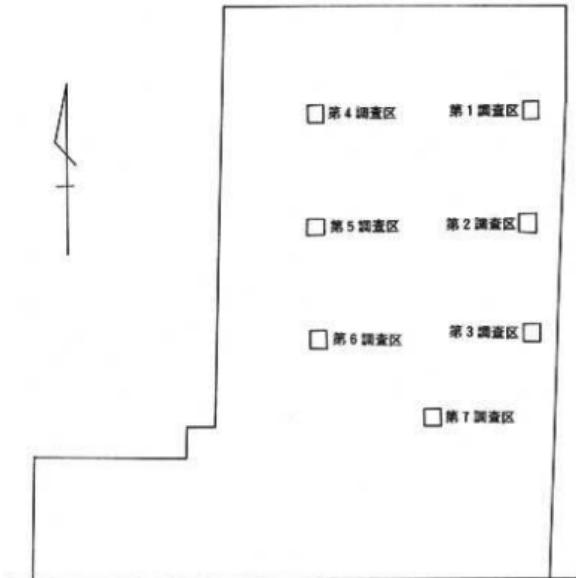
第5調査区においては、地表下2.6 m以下にある層厚4.0 cm以上の黒灰色粗砂混じり粘土層が弥生時代中期の遺物包含層であるのを確認した。

第6調査区においては、地表下2.6 m以下にある層厚5.0 cm以上の黒灰色粗砂混じり粘土層が弥生時代中期の濃密な遺物包含層であるのを確認。また1.8 m付近の暗灰褐色粘質土は古墳時代初頭の遺物包含層である。

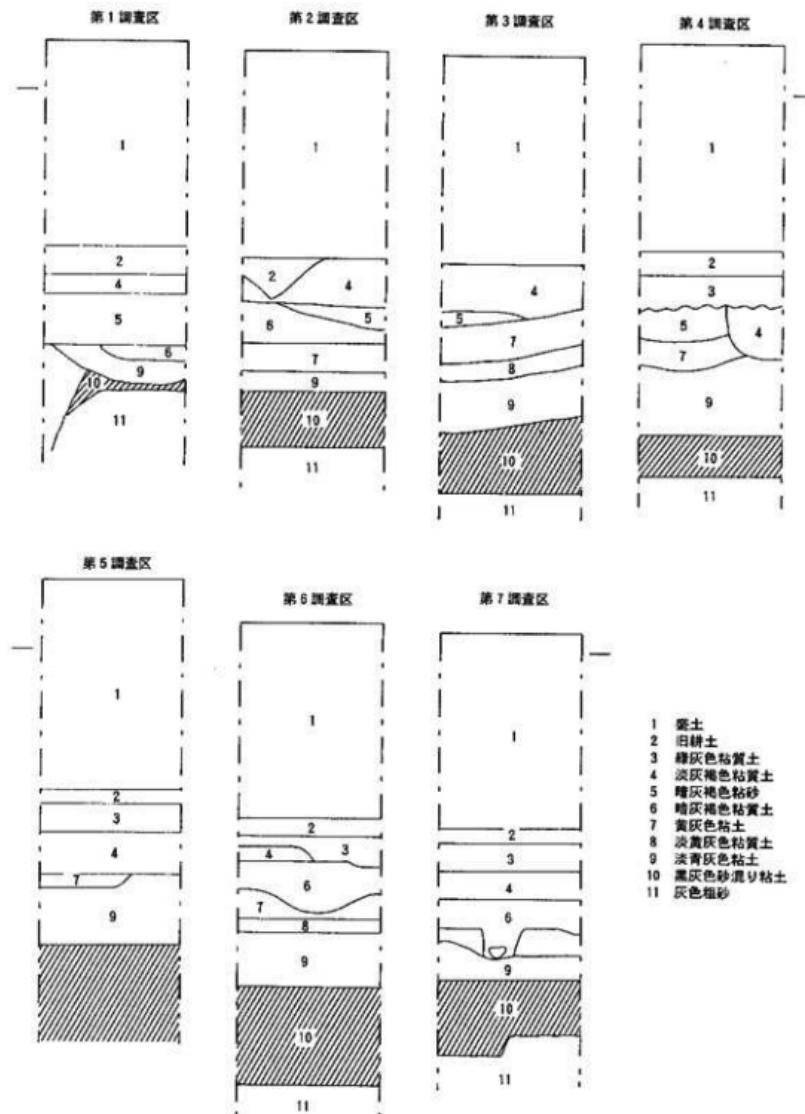
第7調査区においては、地表下2.5 m以下にある層厚5.0 cm以上の黒灰色粗砂混じり粘土層が弥生時代中期の濃密な遺物包含層であるのを確認した。また1.9 m付近の暗灰褐色粘質土は古墳時代初頭の遺物包含層で、ピット状の遺構が存在する。

## 5. 調査結果

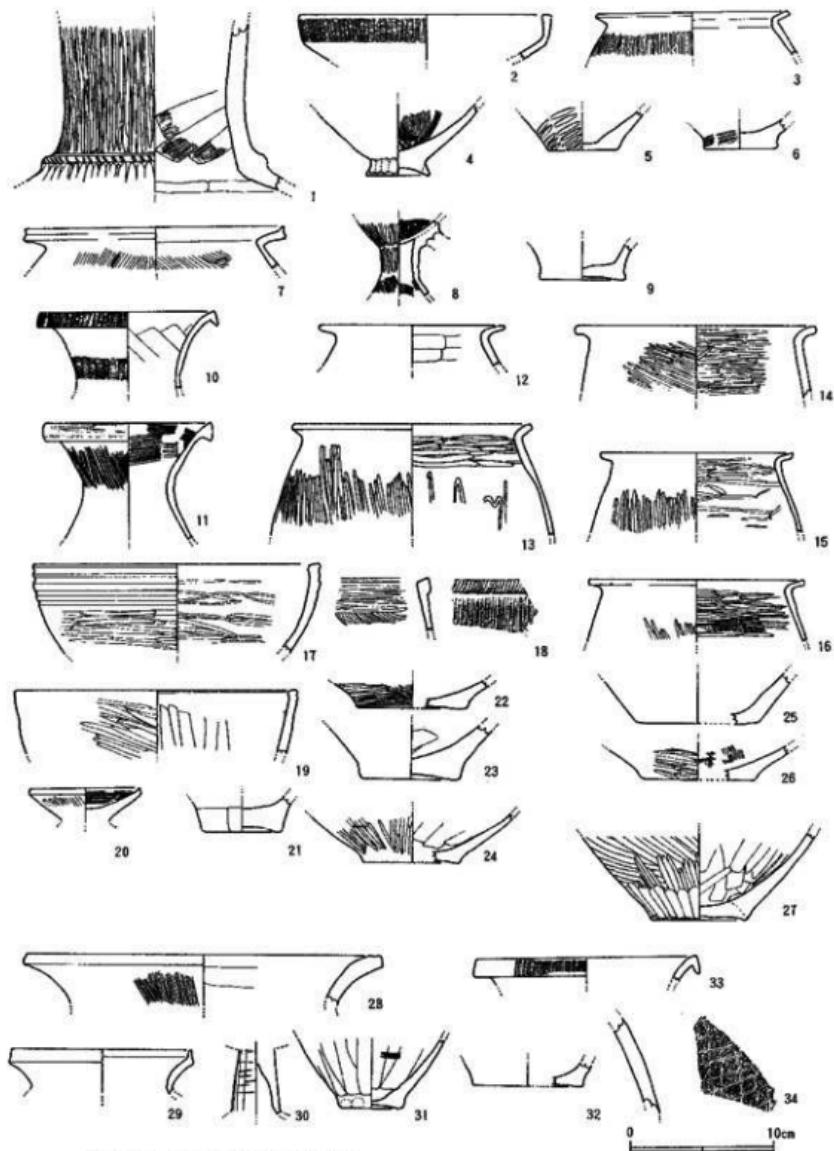
現地表下2.3 m以下の弥生時代中期の遺物包含層からは、各調査区において多数の土器や石器・木製品等の類が出土し、ここが弥生時代集落の中心部の一隅にあることを想起させる。隣接する府道の調査でも同時代の墓跡が検出されており、当該時代の遺跡が密に存在することが想定できる。また、調査地の南西部の2つの調査区では現地表下1.8 m付近に、古墳時代の遺構の存在も想定され、両時代の遺構の保存に留意する必要がある。（米田）



第37図 調査区設定図 (1/1000)

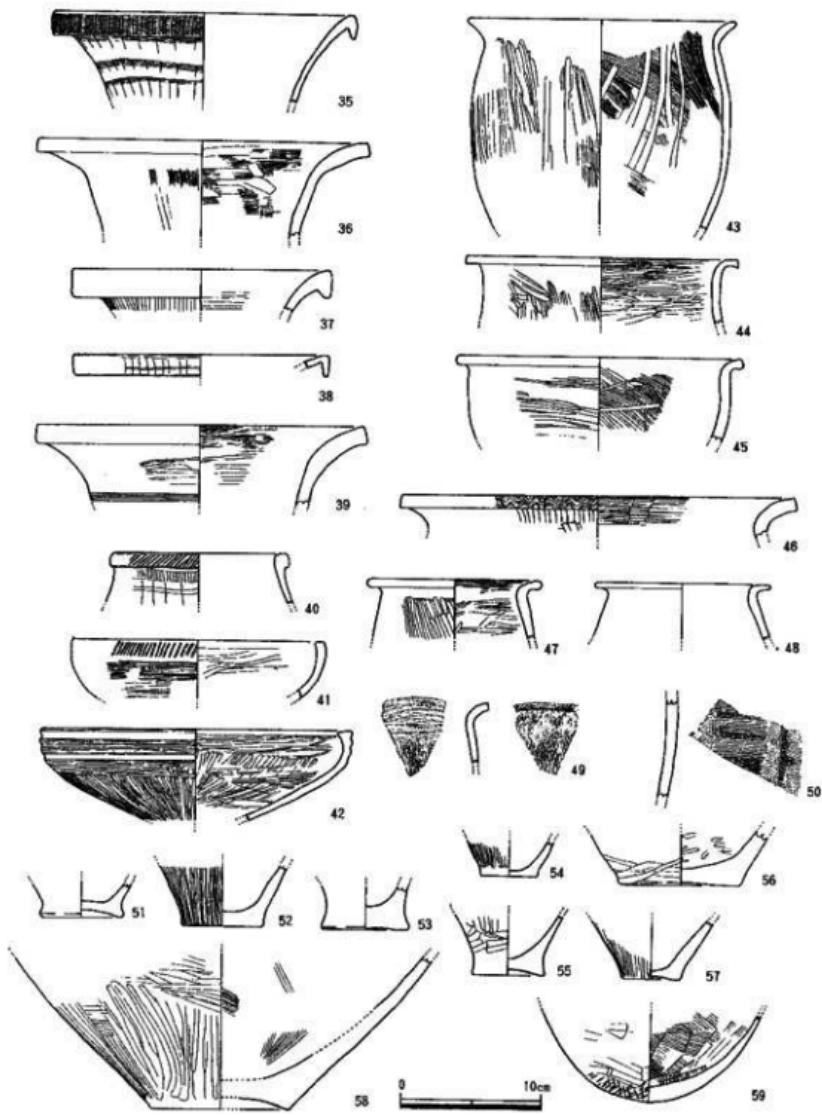


第38図 土層断面図 (1/40)

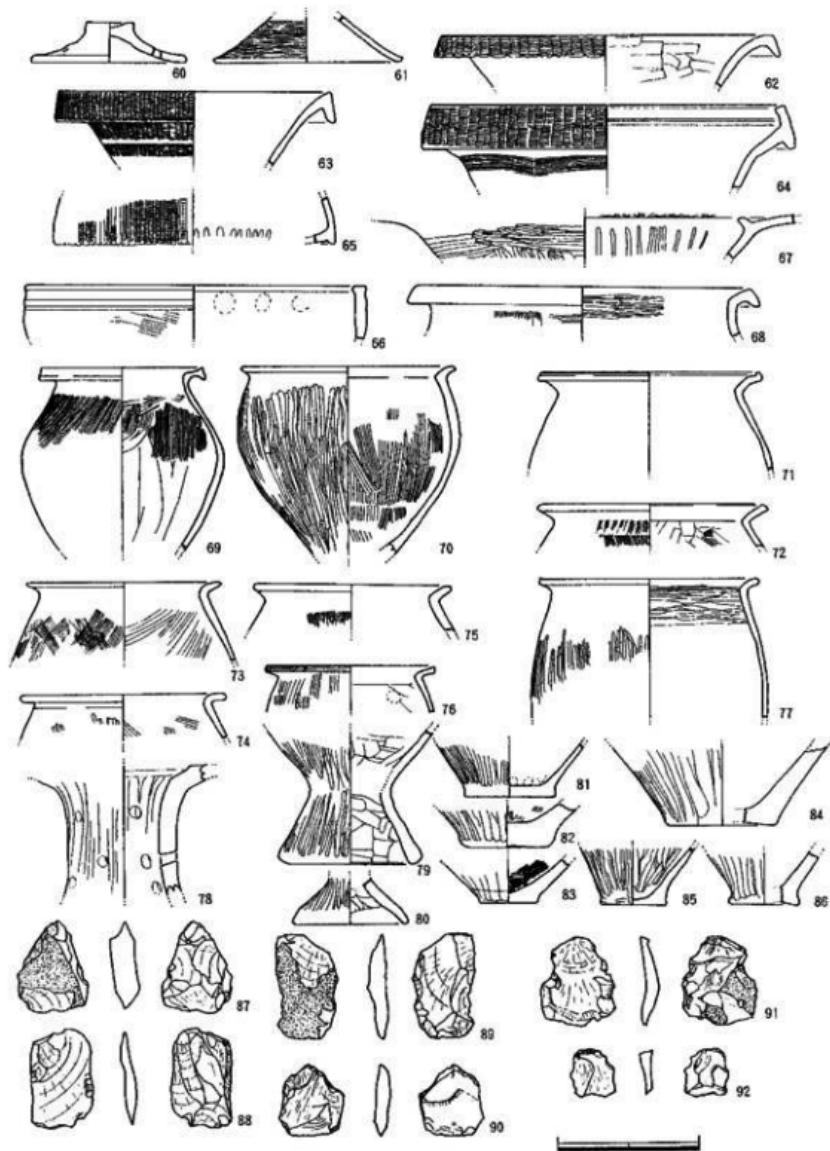


第39図 出土遺物実測図 (1/4)

( 1 ~ 6 第1調査区、7 ~ 9 第2調査区、10 ~ 27 第3調査区  
 28 ~ 32 第4調査区、33 ~ 34 第5調査区 )



第40図 出土遺物実測図 (1/4) (35~58第6調査区、59第7調査区)



第41図 出土遺物実測図

(1/4) (60～86第7調査区、87～92各調査区出石器)

## 10. 高安古墳群（94-360）の調査

1. 調査地　垣内5丁目62
2. 調査期間　平成6年10月18日
3. 調査方法　開発予定地範囲において $2 \times 2$ mの調査区を4箇所設定した。各調査区においては、機械と手作業による掘削及び精査を行って、遺構と遺物包含層の確認及び遺物の收拾を実施した。その後掘削断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要　建築敷地南端の第1調査区では、地表下0.4m、地山直上の茶褐色礫混砂質土層に僅かに遺物が包含されているのを確認した。第2調査区でも地表下0.5mまで掘り下げたところ、茶褐色礫混砂層に土師器・須恵器片が包含されているのを確認した。第3調査区では地表下0.3～0.4mでも地山直上の茶灰色小礫混砂質土に同様の包含層を確認した。北端の第4調査区では、大小の岩礫が多量に堆積する黄褐色の砂質土の下の細砂層より奈良時代の土師器の盤を検出した。

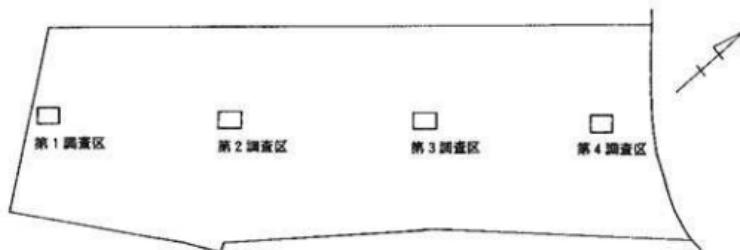


第42図 調査地周辺図 (1/5000)

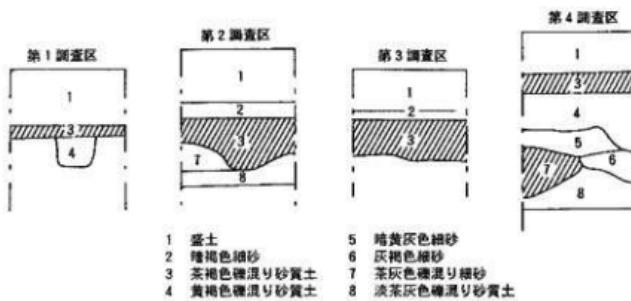
## 5. 調査結果

本調査で確認した奈良時代～平安時代の包含層は、希薄ではあるが、高安山西麓の扇状地上部の開発時期を考える上で貴重な資料であり、高安古墳群との関連をも伺わせる。今後付近の調査の進展によって遺跡の性格がより明らかにされることに期待したい。

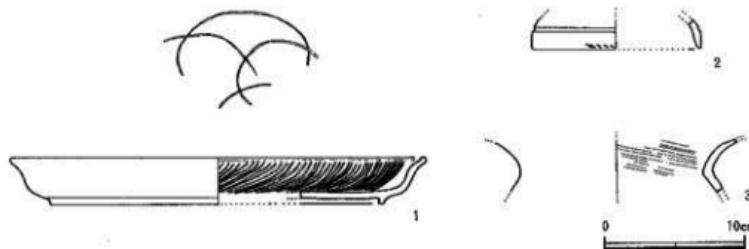
(米田)



第43図 調査区設定図 (1/500)



第44図 土層断面図 (1/40)



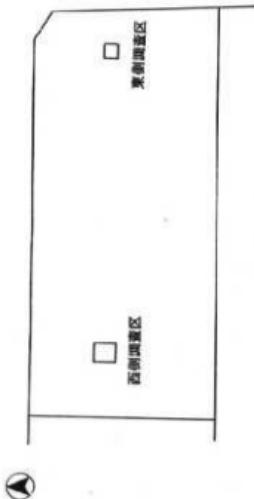
第45図 出土遺物実測図 (1/4) (1 第4調査区、2・3 第2調査区)

## 11. 東郷遺跡（94-144）の調査

1. 調査地 桜ヶ丘1丁目34、37
2. 調査期間 平成6年6月14日
3. 調査方法 施工予定地の西と東に約3m四方の調査区を2ヶ所設定。西側調査区では、地表下1.56m、東側調査区では地表下1.9mまで、重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 西側調査区では地表下0.6mの茶灰白色粘性砂質土層上面で鎌倉時代前後の土器を含む遺構のきりこみを検出した。さらに地表下1.2mの灰褐色粘砂層上面で柱穴状の切りこみを検出した。地表下0.6m～1.2mは、上から茶灰白色粘性砂層・淡茶灰白色粘性砂質土層・明褐灰色シルト質粘砂層であり、古墳時代から鎌倉時代の土器を含む。東側調査区では地表下0.6m前後で鎌倉時代前後の遺構面に対応する可能性のある茶褐色斑灰白砂質土層を確認したが、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。  
(吉田)

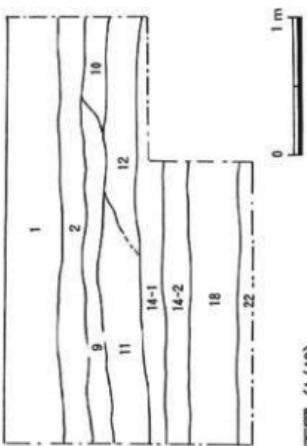


第46図 調査地周辺図 (1/5000)



第47図 調査区設定図 (1/800)

1 粘土層（灰色砂質）	11 茶灰白色砂質土層
2 鮎竹土	12 明茶灰白色砂質土層
3 茶灰白色粘土層	13 茶灰白色粘性砂質土層
4 暗茶灰白色砂質土層	14-1 茶灰白色粘性砂質土層
5 暗茶灰白色砂質土層	14-2 茶灰白色粘性砂質土層 (粘質大)
6 淡茶灰白色粘性砂質土層	15 明茶灰白色粘性砂質土層
7 褐灰白色粘性砂質土層	16 褐灰白色粘性砂質土層 —— 乾穴塵土
8 茶灰白色粘性砂質土層	17 褐褐色粘性砂質土層
9 褐褐色灰白色砂質土層	18 褐褐色灰白色砂質土層
10 褐白色砂質土層	19 茶灰白色粘性砂質土層
	20 褐灰白色粘性砂質土層
	21 茶灰白色砂質土層
	22 褐灰白色粘性砂質土層



第48図 調査区土層断面図 (1/40)

## 12 東郷遺跡（94-182）の調査

- 調査地 桜ヶ丘1丁目23, 24
- 調査期間 平成6年6月28日
- 調査方法 造構、遺物の有無を確認する目的で、共同住宅計画敷地内の東西2箇所に3m四方の調査区を設定し、機械による掘削ののち、手作業により包含層の掘削及び断面精査を実施した。その後写真撮影及び断面実測を行った。
- 調査概要 西側の第1調査区では、地表下1.2mまで近世以後の堆積土で、その直下の土師器片・須恵器を含む層厚約1.5cmの灰褐色砂混じり粘質土層が遺物包含層として存在することを確認した。その下の淡黄灰色シルト層を抜くと黄灰色粘土層であるが遺物の包含は認められない。  
つぎに掘削した東側の第2調査区では地表下0.6m以下に層厚約6.0~7.0cmの茶灰色砂質粘土層~暗灰色砂質粘土層内に多量の須恵器・土師器片が包含されている状況を確認した。またその直下の暗黄色シルト層上面には柱穴状の造構が確認され、この造構面に何らかの住居または建物跡が存在す



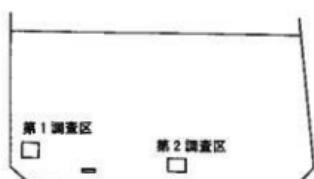
第49図 調査地周辺図 (1/5000)

る可能性を看取できた。また両者の土層の関係を確認する為中間に  $1 \times 2$  m の掘削を行ったが基本的層位は第2調査区と同様であった。

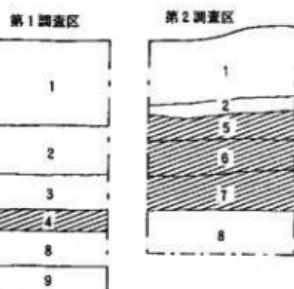
## 5. 調査結果

今回調査した包含層には、奈良時代の須恵器片が含まれており、この時期を前後するものとみられるが、遺物の多さから集落域の主要部分にあたっており、何らかの遺構が存在することは確実であろうと思われる。当該地の南側の試掘結果でも同時期の遺構が顕著にみられることから、東郷遺跡の集落のありかたを知る上で重要である。

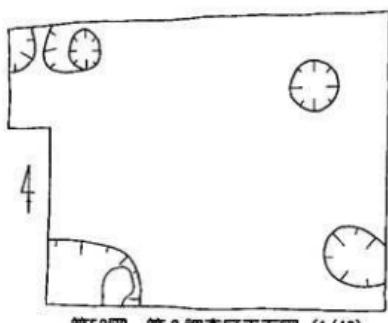
(米田)



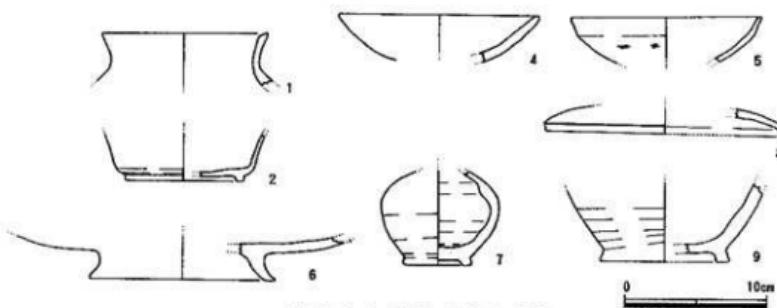
第50図 調査区設定図 (1/1000)



第51図 土層断面図 (1/40)



第52図 第2調査区平面図 (1/40)



第53図 出土遺物実測図 (1/4)

### 13. 東郷遺跡（94-303）の調査

1. 調査地 本町1丁目30-1
2. 調査期間 平成6年9月7日
3. 調査方法 建築物予定地範囲において $2 \times 3\text{m}$ の調査区を南北2箇所に設定し、機械により盛土を除去したのち機械及び手作業による調査を行い、遺構及び遺物包含層の確認及び遺物の取り上げを実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 南側の第1調査区においては、盛土を除去した後、地表下1.6mまでは、近世の遺物を包含しており、以下茶灰色～黄灰色の細砂層が厚く堆積する。砂層内には中世後期の遺物片が少量混じっている。  
北側の第2調査区については、地表下1.4mより落ち込む溝状の堆積が確認され、地表下1.9m付近に中世～近世の瓦・陶磁器・土釜等を多く含む遺物の集積がみられた。この溝のベースも河川状の砂の堆積となっており、中世後期の遺物が含まれている。



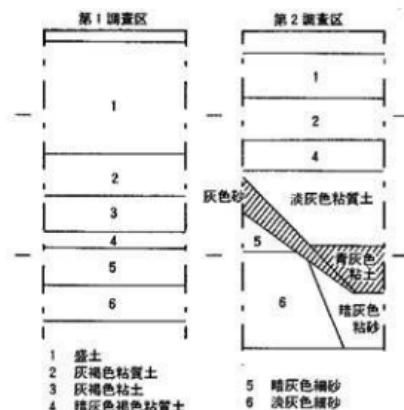
第54図 調査地周辺図 (1/5000)

## 5. 調査結果

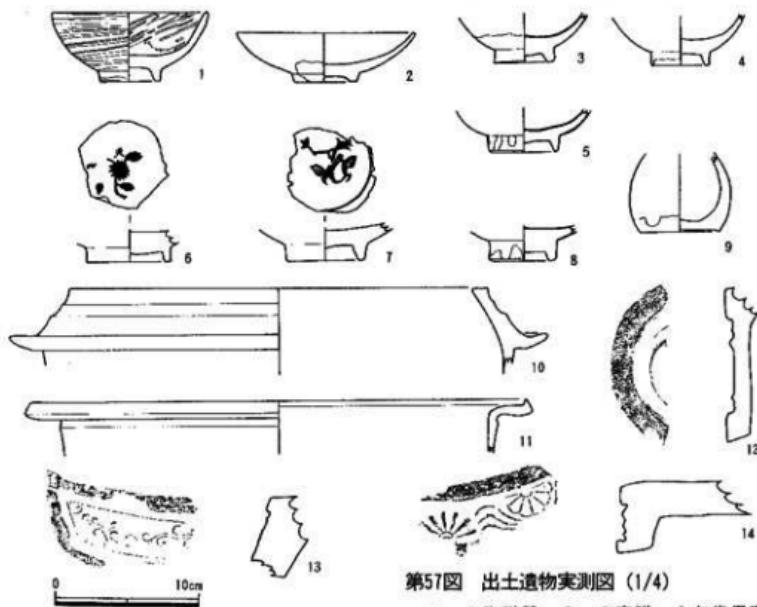
出土した遺物類は、主に第2調査区の溝状の落ち込みからである。大半が唐津焼等の近世陶磁器であるが中世瓦の瓦当や青磁片もみられる。当該地付近では、北北西から南南東方向に条里の乱れがあり、中世後期の河川跡であったものが近世に水路として利用されていた状況が想定できる。(米田)



第55図 調査区設定図 (1/500)



第56図 土層断面図 (1/40)



第57図 出土遺物実測図 (1/4)

- 42 -  
1 ~ 5 陶磁器、6 ~ 8 青磁、9 お歯黒壺  
10・11土釜、12~14瓦類

## 14. 中田遺跡（93-403）の調査

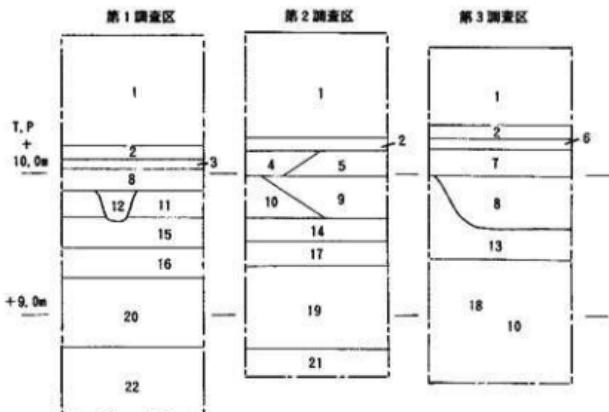
1. 調査地 刑部4丁目210-1
2. 調査期間 平成6年3月14日
3. 調査方法 事業計画地に約2.5m×2.5mの調査区を設定し、各々地表下2.5m～2.7mまで掘削、調査した。
4. 調査概要 第1調査区－地表下1.1m前後の淡灰褐色小礫混細砂層が遺構面となり、灰色砂混粘質土を埋土とするピットが検出され、埋土中より、砥石・石器剝片、土師器片が出土している。またこの遺構構築層中より弥生土器片、石器剝片、土師器片が見つかっている。  
第2調査区－地表下1.1m前後の灰色粘質土を切り込むように淡茶色砂混粘砂が堆積している。この淡茶色砂混粘砂には遺物はみられない。しかし灰色粘質土及びその下部の茶灰色微砂混粘砂には須恵器蓋杯、土師器片が出土している。本調査においては出土遺物は碎片がほとんどであるが、杯身は唯一時期が比定できるものである。TK47～MT15に比定されよう。



第58図 調査地周辺図 (1/5000)



第59図 調査区設定図 (1/800)



- 1 盆土
- 2 旧耕土
- 3 暗褐色粘土
- 4 茶灰色砂
- 5 淡灰茶色粘砂
- 6 褐色粘砂
- 7 淡茶灰色砂混粘質土
- 8 灰色砂混粘質土
- 9 淡茶色砂混粘砂
- 10 灰色粘質土
- 11 淡灰茶色砂混粘砂
- 12 灰色砂混粘質土
- 13 淡灰白色砂混粘砂
- 14 茶灰色砂粒混粘砂
- 15 淡暗灰色砂混粘砂
- 16 淡茶灰色砂
- 17 淡茶色砂礫
- 18 褐色粘砂～礫混
- 19 灰色粘砂
- 20 淡灰茶色砂混粘砂
- 21 褐色砂混粘砂
- 22 淡褐色粘砂

第60図 基本層序模式図 (1/40)

第3調査区－地表下0.8mの淡茶灰色砂混粘質土と0.95mにある灰色小砾混粘質土中に弥生土器、瓦、土師器がみられる。また灰色小砾混粘質土上面ではピット4基を検出している。ピットはいずれも径0.35m～0.4m、深さ0.12～0.25mで灰色砂混粘質土を埋上としている。遺物は土師器の碎片が僅かに出土している。

4. 備考 本調査地ではピットを数基検出した。しかしその時期は出土遺物が碎片であり、また僅かなことから明確にすることはできなかった。中田遺跡は旧大和川の玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地に立地しているが、特に本調査地は玉串川の自然堤防上に位置しており、旧耕土から0.75～1.0m下ではその堆積層と推定される砂層を確認できた。  
(消)

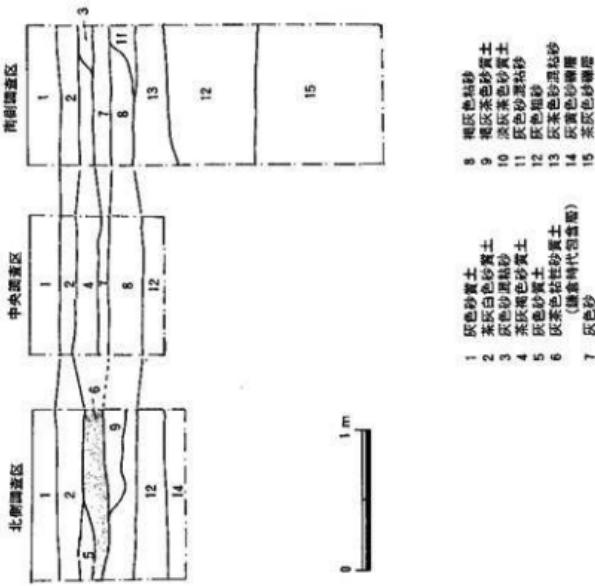
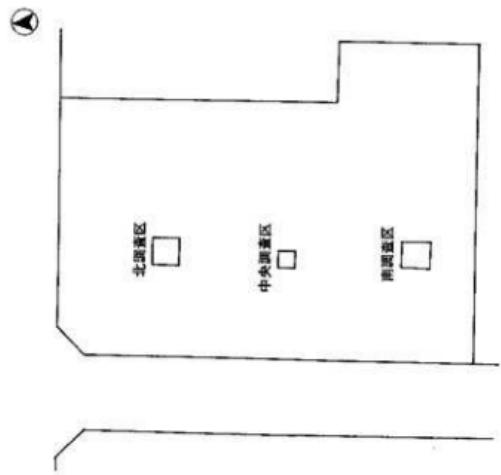
## 15. 中田遺跡（94-14）の調査

1. 調査地 中田1丁目20、21-2、22-2、33
2. 調査期間 平成6年5月13日
3. 調査方法 調査区の北側と南側に約3m四方の調査区を2ヶ所設定。中央に2m四方の調査区を1ヶ所設定し、重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 北側調査区では地表下1.0mまで掘削したところ、地表下0.35m～0.55mで鎌倉時代初頭の土器片を密に含む灰茶色粘性砂質土層を確認した。この層の直下の淡灰茶色砂質土が鎌倉時代の遺構面になると考えられ、土器片を若干含む。中央調査区では地表下0.56mで、南側調査区では地表下0.6mでこの面に対応すると考えられる褐灰色粘砂層を確認した。南側調査区では地表下2.4mまで掘削を行なったところ、地表下0.74m以下で粗砂層の堆積を確認した。これは、これまでの付近の調査で確認された河川状堆積の一部と考えられる。  
（吉田）

（註1）八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書II』1994



第61図 調査地周辺図 (1/5000)



第62图 调查区设立图 (1/600)

第63图 调查区土壤断面柱状图 (1/40)

## 16. 中田遺跡（94-339）の調査

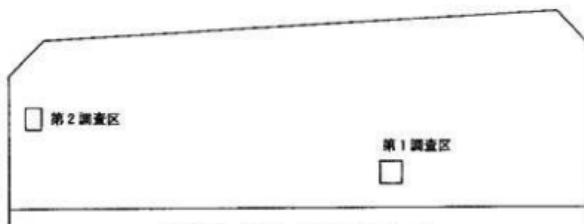
1. 調査地 八尾木北6丁目19
2. 調査期間 平成6年9月12日
3. 調査方法 建築物予定地範囲において $2.5 \times 2.5$ mの調査区を東側に、 $1.5 \times 2$ mの調査区を西側に各1箇所設定した。機械により盛土を除去したのち機械及び手作業による調査を行い遺構及び遺物包含層の確認及び遺物の取り上げを実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 東側の第1調査区においては、盛土を除去した後、旧耕土以下0.7m、地表下1.8mで古墳時代の古式土師器を含む暗黄灰色の粘質シルト層に達し、以下約60cmの厚みでこの遺物を濃密に含む包含層が堆積している。包含層の最下層は、濃灰色の粘土となり、青灰色のシルトをベースとしている。西側の第2調査区についても、同様の深度に類似した土層の堆積がみられたが、検出できた土器片は微量であった。



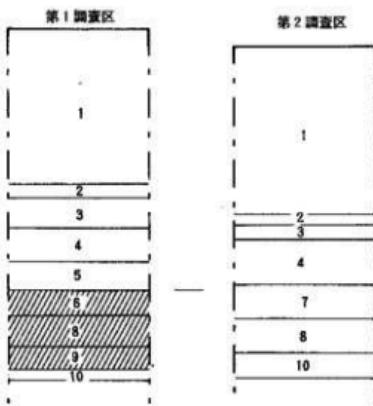
第64図 調査地周辺図 (1/5000)

5. 調査結果　出土した上器類は、弥生時代末～古墳時代初頭の庄内式土器を中心としたもので、集積状に堆積していたと考えられる。楠根川周辺では、同時期の遺構が多く検出されていることから、本調査地も3世紀を中心とした時期の集落の一角に位置するものと思われ、少なくとも調査地東側については遺構の保存に留意する必要がある。

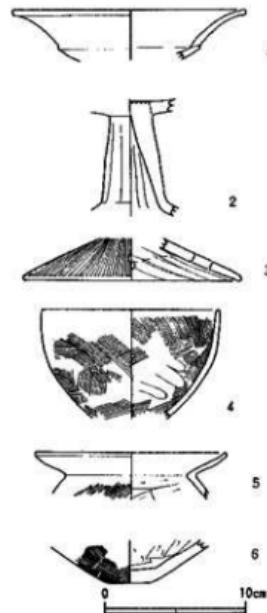
(米田)



第65図 調査区設定図 (1/500)



第66図 土層断面図 (1/40)



第67図 出土遺物実測図 (1/4)

## 17. 東弓削遺跡（94-484）の調査

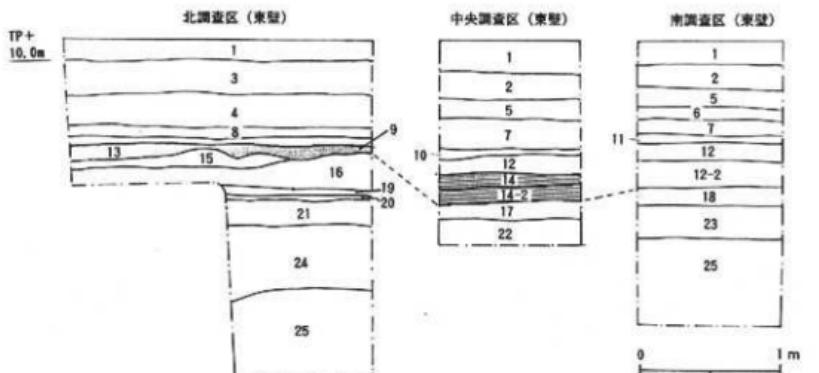
1. 調査地 八尾木4丁目90、91の一部
2. 調査期間 平成6年12月2日
3. 調査方法 施工予定地の北と南に3m四方の調査区を、中央に1.5m四方の調査区を設定し、重機と人力を併用して掘削を行なった。
4. 調査概要 北調査区では地表下2.4mまで掘削を行なったところ、地表下0.74m～0.86mで平安時代初頭の土器片を密に含む灰色炭混粘砂層を確認した。更に、包含層直下TP+9.4m前後の黄灰色シルト層上面で溝を検出した。この溝は、最大幅0.35m、深さ0.1m前後を測り、埋土は灰色砂質である。平安時代の土器片が少量出土している。また、遺構面の構成層である黄灰色シルト層及び褐色斑灰色シルト層にも、同時期の土器片が若干含まれていた。更に部分的に下層確認を地表下2.4mまで行なった。この結果、地表下1.3mまでシルト層であり、これより下は地表下1.76mまで白色斑灰色粘土層、これ以下で灰白色粗砂層を確認した。灰白粗砂層からは須恵器の壺片が1点(40)出



第68図 調査地周辺図 (1/5000)

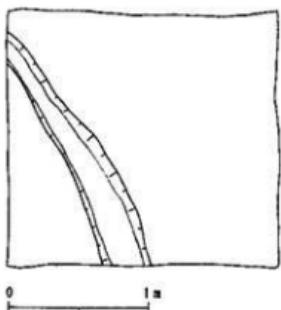


第69図 調査区設定図 (1/600)



- |                     |  |                   |
|---------------------|--|-------------------|
| 1 表土層（灰色砂質土層）       | 11 暗褐色斑状白色漂砂質土層                        | 17 灰黃色シルト質粘砂層     |
| 2 茶褐色斑状灰色粘砂層        | 12 暗褐色斑状白色粘土層                          | 18 暗褐色斑状黃白色散砂シルト層 |
| 3 明灰黄色粘砂層           | 12-2 暗褐色斑状白色粘土層（粘性大）                   | 19 棕色粗砂層          |
| 4 灰茶色粘性砂層（土師器片含む）   | 13 灰色砂混粘砂層<br>（ブロック混灰黄色<br>シルト・炭を密に含む） | 20 灰黃色粘土層         |
| 5 明灰茶色粘砂層           | 14-1 灰黃褐色炭混粘砂層                         | 21 灰黑色散砂シルト質粘砂層   |
| 6 明灰茶色粗砂層           | 14-2 灰黃褐色炭混粘性砂層                        | 22 灰褐色シルト層        |
| 7 棕色斑状白色粘砂層（土師器片含む） | 15 黄灰色シルト層                             | 23 灰青褐色シルト質粘砂層    |
| 8 淡灰茶色粘砂層           | 16 暗褐色斑状灰色シルト層                         | 24 白色斑状暗灰色粘土層     |
| 9 黄灰茶色粘砂層           |  | 25 灰黄白色粗砂層        |
| 10 褐灰白色粘土層          |  |                   |

第70図 調査区土層断面柱状図 (1/40)



第71図 北調査区遺構平面図（1／40）

黄白色微砂シルト層を確認しており、これもまた、北調査区検出の遺構面構成層等に対応していく可能性をもつ。この層の上に堆積する褐色斑灰白色粘土層は上師器、須恵器、瓦器小片などを含む中世以降の堆積である。また、下層では、地表下1.4m以下で北調査区と対応する粗砂層を確認した。ここからは、平安時代前期に位置付け得る土師器片、須恵器片が出土している。

北調査区で確認した灰色炭混粘砂層は、炭を多く含み、二次焼成を受けた土器を何点か含んでいた。中央調査区出土の軒丸瓦も瓦当面に二次焼成とみられる痕跡がある。この灰色炭混粘砂層中には、直下の遺構面構成層である黄灰色シルト層がブロック状に含まれてた。このことから、火災などによる、廃絶後の削平などの状況が想定できるが、今回の調査では、焼土面は検出できておらず、判然としない。

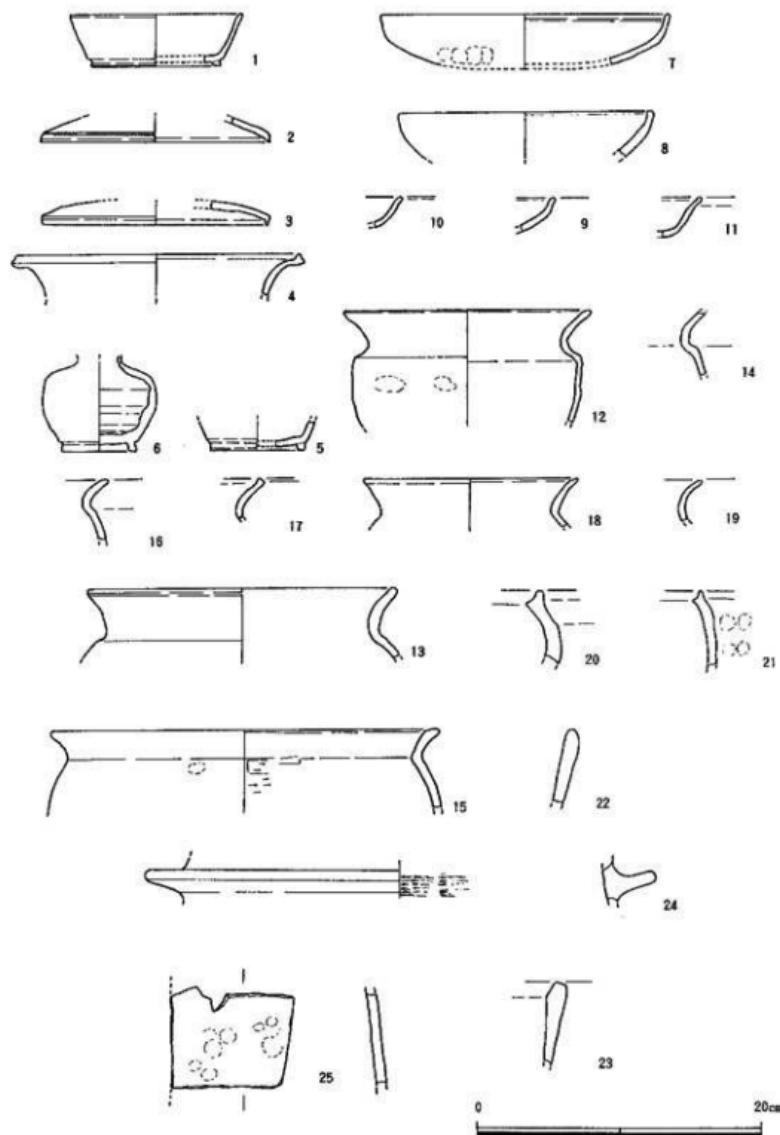
中央調査区で確認した平安時代中期の土器片等を含む灰黄褐色炭混粘砂層は、レベル的に北側調査区の平安時代初頭包含層より0.35m程度低い。1m四方のグリットであったため、判然としないが、平安時代初頭包含層を切り込む平安時代中期の遺構の埋土の残存の可能性がある。この層の直上には、褐色斑灰白色粘土層が堆積するが、この層は南調査区で検出した瓦器小片などを含む層と近似する。平安時代の遺構・包含層がこの土層により、削平されている可能性がある。いずれにしても、調査範囲が、狭小であったため、調査地全体の層序関係は明確にし難い。

## 5. 出土遺物

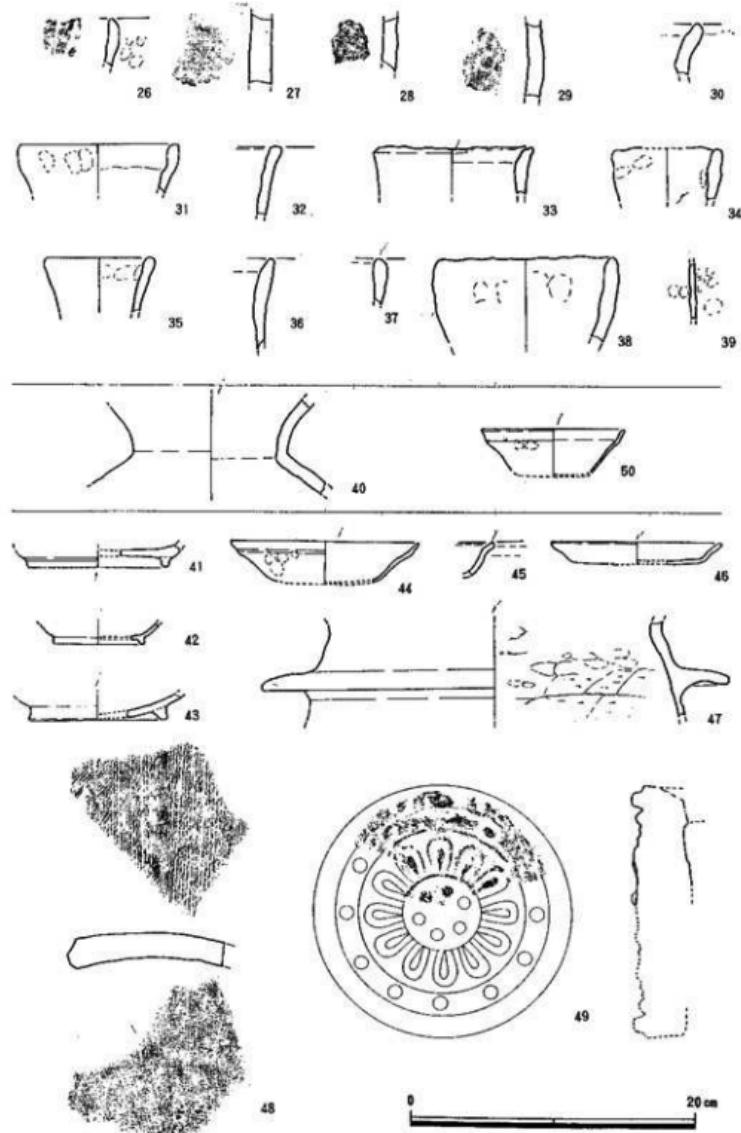
北側調査区でバスケットにして3杯分、中央調査区で1杯分、南側調査区で若干量の遺物が出土した。

上した。中央調査区では地表下0.73m～1.14mで平安時代中期の土器片を含む灰黄褐色炭混粘砂層を確認した。ここからは土器片の他に細弁十二葉の軒丸瓦片が出土している。更にこの下で灰黄色微砂シルト層を確認した。この層は北調査区で検出した遺構面構成層もしくはその下の層と対応する可能性がある。

南側調査区では地表下2.0mまで掘削したが、平安時代の包含層は確認できなかつた。ただ、地表下1.0m前後で、褐色斑灰



第72図 出土遺物実測図 (1/4)  
(北調査区包含層出土 須恵器 1~6、土師器 7~25)



第73図 出土遺物実測図 (1/4)

(北調査区包含層出土 製塩土器26~39、北調査区灰白粗砂出土40)  
(南調査区出土50、中央調査区出土41~49)

### [北側調査区灰色炭混粘砂層出土遺物]

灰色炭混粘砂層から須恵器、土師器、製塙土器等が出土している。奈良時代後半から末に位置付けられるものが若干あるが、ほぼ平安時代初頭の上器である。

須恵器には、杯B（1）、杯B蓋（2、3）、甕（4）壺（5、6）がある。1は高台が底面の外側にとりつく。3は淡灰白色を呈し、軟質である。6は二次焼成を受け、器面外面の傷みが著しい。内面には炭化物が付着する。この他に白色物質の付着する須恵器の甕片がある。土師器には杯（7）、碗（8、9）、皿（10、11）、甕（12～19）、鉢（20、21）、羽釜（24）、瓶（22・23）、竈（25）がある。この他に細片であるが、内面に放射状暗文をもつ皿と思われる破片がある。7は口端部内面に一条の沈線がはいる。8、11は口端部内面が肥厚する。12、13、14、16、17は口縁部が外反し、体部外面をユビオサエ調整を残す河内型の甕である。25は竈の炊き口部の破片である。

26～39は製塙土器である。北調査区の包含層からは、破片にして77点の製塙土器が出土した。ここでは、便宜上、形態及び色調などの特徴から下記の4つに分類した。

- ・ I類—内面に布目痕のみられるもの。器壁は比較的厚手である。23点出土した。このうち口縁部の破片は3点である。布目は非常に細かいもの（約50本/cm）から粗いもの（約8本/cm）まである。胎土は長石、石英など角礫を多く含むものと、チャート、長石などの円礫を含むものがある。
- ・ II類—内外面とも粗いユビナデないしはユビオサエを行ない、器壁は厚手のものである。乳白色もしくはやや燈色を帯びた乳白色を呈す。30点出土した。このうち、口縁部片は9点であり、直線状とやや内湾する口縁がある。チャート、角閃石、石英などの角礫を含むもの、チャートなどの円礫を含むものがある。
- ・ III類—I類と同じであるが、色調が燈色～淡灰茶色を呈するもの。11点出土している。このうち、口縁部は3点である。  
クサリ礫、チャート、長石などの角礫を含むものが主体である。
- ・ IV類—内外面とも粗いユビナデないしはユビオサエを行ない、器壁は薄手のものである。3点出土している。

26～29はI類である。26は口縁部の破片で、外傾する端面となる。30～35はII類である。29は胎土中にモミガラを含む。31はやや内湾する口縁部である。33～35は直行する口縁部である。33はモミガラを含む。36～38はIII類である。38は口縁部が内湾するもので、色調は燈灰色を呈する。39はIV類である。内外面はユビオサエを行なう。胎土はクサリ礫、チャート、石英、金雲母を少量含むものであり、I～III類に比べ、やや精良である。

出土土器は3、11は奈良時代後半に位置付けられるが、他は平安時代初頭前後に位置付け得

るものである。

#### 〔中央調査区灰黄褐色粘砂層出土遺物〕

須恵器、土師器、瓦、製塙土器が出土している。須恵器には杯B(41)、壺片などがある。土師器は高台付椀(42、43)、椀(44)、皿(45、46)、羽釜(47)、平瓦(48)、軒丸瓦(49)がある。高台付椀は器壁が厚く胎土の粗いもの(43)と、薄手で胎土の比較的精良なもの(42)とがある。44は薄手で口縁部外側から内面にヨコ方向のナデをおこない、体部外側はユビオサエを残す椀である。45は口端部に一条の沈線の入る皿である。46は口縁部がやや外反する皿である。48は硬質の平瓦である。凹面に二次焼成を受けた痕跡がある。49は細弁十二葉の軒丸瓦である。瓦当部の破片で、瓦当部の推定径は18.0mを計る。瓦当面は二次焼成を受け、黒灰色を呈し、傷みが著しい。蓮弁は丸みをもち、互いに輪郭を共有しない。圓線を経て外区には蓮弁の頂点延長上に大きめの珠文を配す。外縁は直立する。平安時代前期の所産であろう。出土土器は45は奈良時代後半に位置付け得るが、他は10世紀後半頃に位置付け得る。

## 6.まとめ

#### 〔出土遺物について〕

北調査区の灰色炭混粘砂層出土の土器は同時期性の高い、まとまった資料である。ただし、<sup>(註1)</sup>包含層資料であり、調査区が狭小であるため、状況把握に限界があるものである。が、近辺でこの時期のまとまった資料はなく、また、後述するように、出土土器の様相が一般の集落とは性格を異にするものと考えられることから、出土土器片の計数を行い、器種別の比率をだしてみた(表1、グラフ1)。資料数が少ないため、計数の際、同一個体の重複を避けながら、部位を問わず、破片を計数したものと、口縁部のみによる計数との両方を呈示した。

この表及びグラフから次のようなことが読みとれる。

- ・製塙土器の比率が非常に高い。破片では77点で41%を占める。口縁部のみの計数でも17点、28.4%を占める。
- ・土師器の比率が高く、須恵器の比率が低い。破片では土師器が44.8%、須恵器が14.2%であり、口縁部のみでは、土師器が58.2%、須恵器13.4%である。土師器では供膳形態と煮炊き用の形態が、ほぼ同じ比率である。

同様にして、溝内出土の土器片の計数を行なったところ、19点中、8点が製塙土器(I類4点、II類2点、III類1点、IV類1点)であり、64%の高率を占める。

製塙土器の比率の高さは当遺跡の性格を示唆するものであろう。製塙土器についても、前述の分類毎に、破片全体と口縁部のみの計数を行なった。破片全体では、内面に布目痕をもつI類が42.8%、II・III類が、53.3%、器壁の薄いIV類が3.9%である。I類は、北九州産とされているものであり、II・III類は紀淡海峽沿岸産とされているもの、IV類は一部西部瀬戸内産と

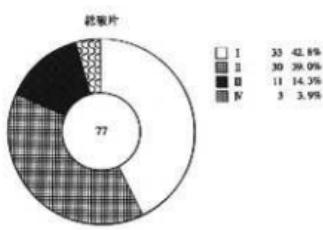
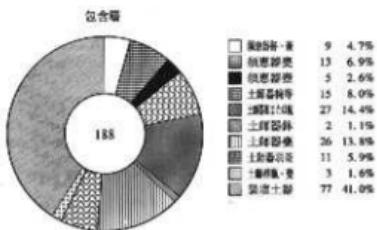
形態	墳 墓 器				上 古 葵							製塩土器	総数				
	供 選		狩 織		食 器			衣 带 等									
	杯	豆	甌	碗	碗(65)	杯(65)	甌(65)	碗(65)	衣 带	羽織	甌	碗					
灰色灰陶 砂質陶	0 (5)	3 (2)	13 (1)	5 (0)	27 (9)	14 (1)	1 (0)	8 (8)	18 (1)	2 (2)	26 (9)	11 (2)	2 (2)	1 (0)	84 (29)	77 (17)	188 (68)
磚	1				2 (0)	2 (0)		1 (0)			2 (0)				9 (0)	14	

（）内は100個中の箇所の数を示す。

表 1 北調査区出土土器種別計数表

総 瓷 片	個数	I類	II類	III類	IV類	総数
		比率 (%)	42.8	39.0	14.3	3.9
口 緑 部	個数	3	11	3	0	17
		比率 (%)	17.6	64.8	17.6	0

表 2 製塩土器類別比率



グラフ1 北調査区包含層土器器種別比率

グラフ2 製塩土器類別比率

されているものである。II・III類が半分以上を占めているが、I類が半数近くを占めていることが、注意される。<sup>(註2)</sup>

このように、複数の産地の製塩土器が含まれていることについては、各生産地との直接的な流通というよりは、いったん中央の機関へ集積されたのちの、各遺跡への再流通と考えられることが指摘されている。<sup>(註3)</sup>

古代の製塩土器については、中央及び地方の官衙、寺院などでまとまって出土し、その機能としては焼き塩用で固形塩として、貢納用に運搬された土器とされている。またその使用目的としては、長岡京では、伴に出土する遺物から、祭祀行為との関連は伺えず、日常の食器類と伴に出土するのが一般的であるとされている。<sup>(註4)</sup>またその出土点としては、公的機関の下部組織とみられる箇所で顕著な出土を見ることが指摘されている。<sup>(註5)</sup>

今回の調査地では、祭祀的な要素は認められず、日常の供膳具、煮炊き用の器種とともに出土している。

（註7）  
次に中央調査区で出土した軒丸瓦についてである。類例は近辺では八尾市東郷院寺、羽曳野市野中寺で出土している。また、東弓削遺跡での府営水道送水管付設に伴う調査中に出土した軒丸瓦も細片のため、蓮弁数は不明だが、類似する可能性がある。さらに12葉・16葉の両者とも平安京造営時の瓦供給窯である吉志部瓦窯で出土している。吉志部瓦窯出土のそれで16葉になるものの同窓瓦は長岡京で出土している。本例は、平城宮出土軒瓦の6133型式もしくは6138型式の系譜をひくものと思われ、管見では平安時代を遡る例を知らない。のことから本例は、前述の平安時代初頭の土器資料と同時期のものと考えられる。

以上の出土遺物の所見から、寺院、官衙等、中央と関係の深い、施設の一部、しかも厨の機能をもつ施設の存在が考えられる。

#### 〔周辺遺跡の状況などについて〕

本調査地の西側には、「焼垣内」「婆々泣」等の小字が伝わっている。また、現在の善立寺には「焼垣内」出土と伝えられる軒丸瓦が保管されおり、同じく「焼垣内」から出土したという十一面觀音像が付近の家に保管されている。このことから、このあたりは三条西公条の『吉野詣記』に記された金剛蓮華寺の推定地とされている。本調査地は小字では「明川端」にあたり、「焼垣内」とは西接する位置にある。「焼垣内」出土の軒丸瓦は平安時代末以降のものと思われる単弁六葉軒丸瓦である。『吉野詣記』の金剛蓮華寺に関する記録は、1553年のものである。このことから、本調査地の出土資料を直接、金剛蓮華寺と結びつけるには、未だ資料不足であるが、平安時代の寺院等の存在を示唆する資料ではある。

さて、中田遺跡、東弓削遺跡では奈良時代から平安時代にかけての遺構・包含層が顕著にみられる（表3）。特に本調査地周辺では、1990年の八尾木東1丁目での遺構確認調査において、奈良時代の包含層を確認している他、1994年の八尾木東3丁目での下水道工事に伴う調査でも、奈良時代末の土器等が出土している。いずれも検出レベルは、標高10.2m前後と本調査地のそれに近い。本調査地でも奈良時代後半の土器片（第72図3、11 第73図45）が出土しており、この時期の遺構の存在が予想される。本調査地南方の都塚付近では奈良時代後半の軒平瓦、綠釉陶器等が、礫敷きとともに出土している。さらに、この近くの小字「北口」付近から、礫灰岩の破片が採集されている。一方、北方の中田、刑部周辺では、奈良時代前半から平安初頭にかけての遺構、遺物が複数箇所で確認されている。

これらの調査成果は、いずれも『続日本紀』に表れる「由義宮」、「弓削寺」との関連で注目されてきた。現段階では、面的な発掘調査によるデータには欠けているが、小規模な調査データ、採集資料等は確実に蓄積されてきている。この時期の寺院・官衙の資料は中世の削平を受けていることが多い。が、小規模な調査であっても多くを語り得る資料でもある。今後もさらに資料の蓄積に努め、有機的に結びつける努力をしていきたい。

（吉田）

遺跡名	調査地	調査期間	確認事項	調査主体	報告書等
東弓削	東弓削地内	1967	外環状線（国道170号線）工事中に土師器などとともに、輪軸陶器片、軒平瓦、平瓦出土	山本博氏採集	『竜田越』(1971)
東弓削	東弓削2～3丁目	1975.12.8 1976.3.31	B-8～B-10トレーナーにて確認確認。軒丸瓦、軒平瓦等出土。	八尾市教委※	八尾市文化財報告3
東弓削	刑部地内	1975.12～1976.2	TP10.2m前後で丸瓦片。	八尾市教委	八尾市文化財報告4
東弓削	東弓削102-1他	1986.12.5～ 12.13	奈良時代～鎌倉時代の土器・ 埴輪	八尾市調査研究会※	研究会報告14
東弓削	八尾木東1丁目94	1990.4.22	TP10.0m前後で奈良時代の包含層	八尾市教委	八尾市文化財報告22
中田	刑部4丁目407-2	1990.9.21	TP10.2m前後で平安時代初頭包含層	八尾市教委	八尾市文化財報告22
中田	刑部3丁目地内	1991.1.16～2.2 ・8	GL-1.5m前後で奈良時代前半小穴、溝（土器を含む）	八尾市調査研究会	研究会平成2年度年報
中田	八尾木北6丁目	1992.10.31. 11.1・11～16. 12.2～18	奈良時代（平城宮IV～V期）の土器を出土する井戸検出	八尾市教委	未報告
東弓削	八尾木東3丁目	1994.1.16～17	TP10.0～10.45mで奈良時代末の土器出土	八尾市教委	八尾市文化財報告32

表3 中田遺跡、東弓削遺跡における奈良時代～平安時代初頭の遺構面・包含層

※八尾市教育委員会

※八尾市文化財調査研究会

- (1) ただ、この包含層については、調査区が2m四方であるため、確認できなかったが、おちこみまたは、溝状の遺構の埋土である可能性もある。
- (2) 製塩土器の生産地をはじめ、遺物の所見にあたっては、大阪府埋蔵文化財協会の秋山浩三氏に有益なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。
- (3) 秋山浩三「第Ⅲ部近畿～東海8、京都府（丹波・山城）」『日本土器製塩研究』1994年
- (4) 岩木正二「7～9世紀の土器製塩」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- (5) 山中章「古代宮都の「製塩」土器小考」『平安京歴史研究』1993年
- (6) 前掲註3文献
- (7) 大阪府教育委員会「東郷遺跡発掘調査概要I - 八尾市桜ヶ丘、旭ヶ丘所在」1989年
- (8) 羽曳野市教育委員会「野中寺塔跡発掘調査報告」1986年  
羽曳野市教育委員会「古市遺跡群IV」1985年
- (9) 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」1976年
- (10) 吹田市立博物館「平成6年度特別展「瓦—平安の都へ」」1994年
- (11) 向日市教育委員会「長岡京古瓦聚成」1987年
- (12) 奈良国立文化財研究所「平城宮出土軒瓦型式一覧」1978年  
奈良国立文化財研究所「平城宮出土軒瓦型式一覧（補遺編）」1984年
- (13) 柏本武雄 奥田尚『西之京周辺史』1982年
- (14) 八尾市教育委員会「八尾市史（前近代）本文編」1988年
- (15) 前掲註13文献

## 北調查区灰色表层粘砂層出土

種類	番号	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	調査・手法	色調	性状	地土	地質	備考
粘土質	1	杯形 底盤	10.0	3.0	内外面-ロコタナデ	灰灰青色	硬	真	1/7	
	2	杯形 口縁部	15.0	1.7	内外面-ロコタナデ	灰灰白色	軟	中中粗	1/12	
	3	杯形 口縁部	25.0	1.7	内外面-ロコタナデ	灰灰青色	硬	中中粗	1/10	
	4	甕	10.0	2.0	内外面-ロコタナデ	灰白色	硬	真	1/10	
	5	甕	6.0	2.1	内外面-ロコタナデ	灰灰青色	非常に硬	真	1/3	
	6	甕	5.0	6.0	内外面-ロコタナデ。外側-二次風成 により不明。	灰灰白色	硬	中中粗	1/2	全体に二次風成受ける。
土器部	7	杯 底盤	20.0	3.0	内壁部外面-内面-ロコタナデ。 体部外面-不定方向ナデ。	灰乳白色	中 中 軟	真	1/11	
	8	杯 口縁部 ～底盤	17.0	3.2	口縁部外面-ロコタナデ。 内面-ユビオサエ。	暗灰青色	硬	粗	1/12	
	9	甕 ～底盤	不 明	2.1	内外面-ロコタナデ	灰灰白色	普通硬度	中中粗	不 硬	
	10	甕 ～底盤	不 明	2.0	口縁部外面-ロコタナデ。 内面-ユビオサエ。	灰 色	软	真 不 硬		
	11	甕 ～底盤	不 明	2.0	口縁部外面-ロコタナデ。 内面-不定方向ナデ。	暗灰白色 (灰色)	中 中 軟	真 不 硬		
	12	甕 ～底盤	17.0	6.0	口縁部外面-ロコタナデ。体部外 面-ユビオサエ。内面-ナデ。	暗灰青色	中 中 軟	真	1/6	体部表面スス付着
	13	甕 口縁部	2.0	4.0	口縁部外面-ロコタナデ。体部外 面-ユビオサエ。内面-ナデ。	暗 色	硬	粗	1/7	
	14	甕 底盤	不 明	4.0	口縁部外面-ロコタナデ。体部内面- 不定方向ナデ。体部外-ユビオサエ	暗 灰 色	硬	粗 不 硬		
	15	甕 底盤	20.0	5.5	口縁部外面-ロコタナデ。 体部外-ユビオサエ。内面-ナデ。	灰 灰 色	硬	粗	1/12	
	16	甕 底盤	不 明	4.0	口縁部外面-体部内面-ロコタナデ ナデの体部外-ユビオサエ。	暗 色	硬	粗 不 硬		
	17	甕 口縁部	不 明	3.0	口縁部内外面-ロコタナデ。	灰 灰 白 色	中 中 軟	真 不 硬		
	18	甕 底盤	14.0	3.5	内面-解壊のため不明。口縁部内面 ロコタナデ。	暗 灰 白 色	まわめて軟	中中粗	1/8	
	19	甕 口縁部	不 明	2.0	口縁部外面-ロコタナデ。	灰 灰 白 色	軟	中中粗	不 硬	
	20	甕 底盤	不 明	3.0	口縁部内外面-ロコタナデ。体部外 面-ユビオサエ。	灰 壤 色	硬	粗 不 硬		
	21	甕 口縁部	不 明	4.0	口縁部外面-内面-ロコタナデ。 体部外-ユビオサエ。	暗 灰 白 色	硬	非常に粗	不 硬	
	22	甕 口縁部	不 明	5.0	内面-タケハケ。内面-ナデ。	暗 灰 白 色	硬	非常に粗	不 硬	
	23	甕 口縁部	不 明	4.0	内面-タケハケ。口縁部内面-ヘラカズ ナ。体部内面-ユビオサエ。	暗 灰 白 色	硬	非常に粗	不 硬	
	24	甕 底盤 (同前)	20.0	2.0	内面-ロコタナデ。内面-ロコタナデ。	暗 灰 白 色	硬	非常に粗	不 硬	
	25	甕 底盤	不 明	6.0	内面-ユビオサエ。ユビナデ。 ナインメント	暗 灰 白 色	硬	非常に粗	不 硬	
陶片上層	26	1 甕 底盤	不 明	3.5	内面-ユビオサエ。スピナデ。	暗 灰 白 色	非常に粗	不 硬		
	27	甕 底盤	人 明	5.0	内面-ユビオサエ。内面-青口目。	灰 乳 青 色	普通硬度	非常に粗	不 硬	

調査土跡	28	1 順 体 部 不 明	4.0	外面-ユビオサス。内面-青白目。	棕 色	非常に 細	非常に 粗	不 明	粘土中根付合む
	29	体 部 不 明	5.2	外面-ニビナゲ。内面-青白目。	瓦 口 垂 色	粗	非常に 粗	不 明	
	30	山腹部 不 明	3.7	外面-ユビオサス。内面-スビナゲ。	乳 白 色	非常に 細	非常に 粗	不 明	
	31	口 端 体 部 不 明	10.6	外面-ユビオサス。内面-スビナゲ。	乳 白 色	粗	非常に 粗	不 明	
	32	口 端 体 部 不 明	4.8	外面-ユビオサス。内面-ユビナゲ。	乳 白 色	粗	非常に 粗	不 明	
	33	山腹部	10.6	外面-ユビナゲ。	乳 白 色	粗	粗	不 明	粘土中根付合む
	34	口 端 部	7.1	外面-ユビオサス。	乳 白 色	粗	非常に 粗	不 明	
	35	口 端 部	7.4	6.0 内面-ユビナゲ。ユビオサス。	淡 乳 白 色	中 中 粗	非常に 粗	不 明	
	36	口 端 体 部 不 明	6.5	外面-不明。内面-ユビオサス。	淡 黄 色	非常に 粗	非常に 粗	不 明	
	37	口 端 部 不 明	5.3	内面-スビオサス。ナゲ。	淡 黄 色	粗	非常に 粗	不 明	
	38	口 端 一休部	12.0	内外面-ユビオサス。	淡 黄 色	粗	非常に 粗	不 明	粘土中根付合む
	39	口 端 体 部 不 明	6.0	内外面-ユビオサス。	乳 白 色	非常に 粗	中 中 粗	不 明	

## 北調査区 灰白色粗砂層出土

調査番	46	裏 面	灰 白 色	不 明	6.2	内外面-ナゲ	淡 灰 色	中 中 粗	中 中 粗	1/4
-----	----	-----	-------	-----	-----	--------	-------	-------	-------	-----

## 中央調査区 灰黃褐色粘砂層出土

調査番	41	杯 体 部	0.8	1.6 内外面-ロクロナゲ。	暗 灰 黄 色	粗	中 中 粗	1/7	
土 跡	42	杯 体 部	0.4	1.6 外面-ユビナゲ。コビオサス。内面-不定方向ナゲ。	暗 灰 黄 色	中 中 粗	粗	1/4	
	43	杯 体 部	0.4	1.8 内外面-ナゲ。	暗 灰 黄 色	中 中 粗	粗	1/4	
	44	杯 体 部	13.2	2.4 口端部外側-内面 ユコ万字ナゲ。	淡 水 球 色	粗	中 中 粗	1/7	
	45	口 端 体 部	12.0	1.5 口端部-ヨコ万字ナゲ。横断外側 ユビナゲもしくはユビオサス。底面内面-不定方向ナゲ。	淡 乳 白 色	粗	粗	1/13	
	46	口 端 部	不 明	外側-ヨコ万字ナゲ。	淡 乳 白 色	粗	粗	不 明	
	47	杯 体 部	30.8	6.7 内外面-ヨコ万字ナゲ。内面-ユビオサス。ヨコヘラケナゲ。	淡 灰 黄 色	粗	非常に 粗	1/6	
瓦	48	瓦 斧	(残長) 13.2	不 明 外面 瓦斧タタキ。内面-青白目。	板 瓦 色	粗	中 中 粗	不 明	二次焼成面あり
	49	瓦斧瓦	瓦当部 13.0	不 明 瓦当部表面 ヨビナゲ。ユビオサス。淡灰褐色(裏面)	淡 灰 色	粗	非常に 粗	不 明	瓦当面一次焼成受けける

## 南調査区出土

土 跡	50	板 瓦	口 端 一休部	10.0	2.00 外面 ユビオサス。曲は不明。	淡 乳 白 色	青 灰 色	中 中 粗	粗	不 明
-----	----	-----	---------	------	---------------------	---------	-------	-------	---	-----

## 18. 八尾寺内町（東郷）遺跡（94-86）の調査

1. 調査地 本町3丁目106, 107
2. 調査期間 平成6年5月16日
3. 調査方法 開発工事に先立ち遺構、遺物の有無を確認する目的で、東西2箇所に3m四方の調査区を設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施した。その後写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 西側の第1調査区で、機械で地表下3mまで掘削し、精査したところ、地表下2.05m前後に土師器片・埴輪片を若干包含している層を確認した。さらに、東側の第2調査区を掘削し、東側の包含層に対応する土層まで掘削したところ、古式土師器の高壙・埴輪等が出土し、さらに掘り下げると弥生式土器片を包含する層をその直下に確認した。これらを包含する層の存在範囲は、地表下約2.0~2.4mであった。当調査区の包含状況はやや密な状況を呈する為、付近に何らかの遺構が存在する可能性があることが確認できた。

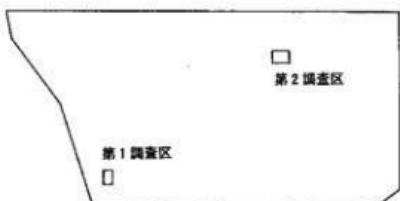


第74図 調査地周辺図 (1/5000)

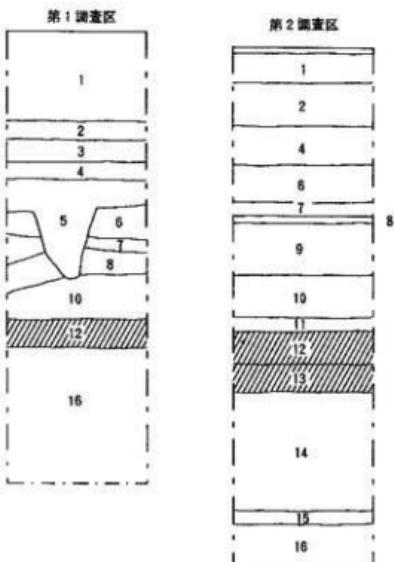
## 5. 調査結果

今回確認した包含層は、東郷遺跡や近隣の成法寺遺跡で確認されている弥生・古墳時代の集落跡に対応する包含層である可能性が想定される。本調査で確認した包含層は古墳・弥生時代の遺構の拡がりを把握する上で重要であり、事業実施にあたっては、少なくとも敷地東側を中心に今後遺構の状況を確認することが必要である。

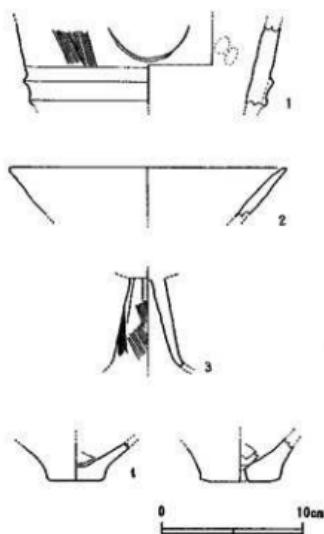
(米田)



第75図 調査区設定図 (1/1000)



第76図 土層断面図 (1/40)



第77図 第2調査区出土遺物実測図 (1/4)

1 盆土	11 暗青灰色粘質シルト
2 耕土	12 暗灰色粘土
4 淡灰色砂質土	13 暗灰色粘質土
6 淡青灰色砂質土	14 明青灰色粘土
7 黄灰色粘質土	15 黒色粘土
8 淡青灰色シルト	16 淡灰色砂質土
9 淡灰白色砂混り粘土	
10 青灰色粘質土	

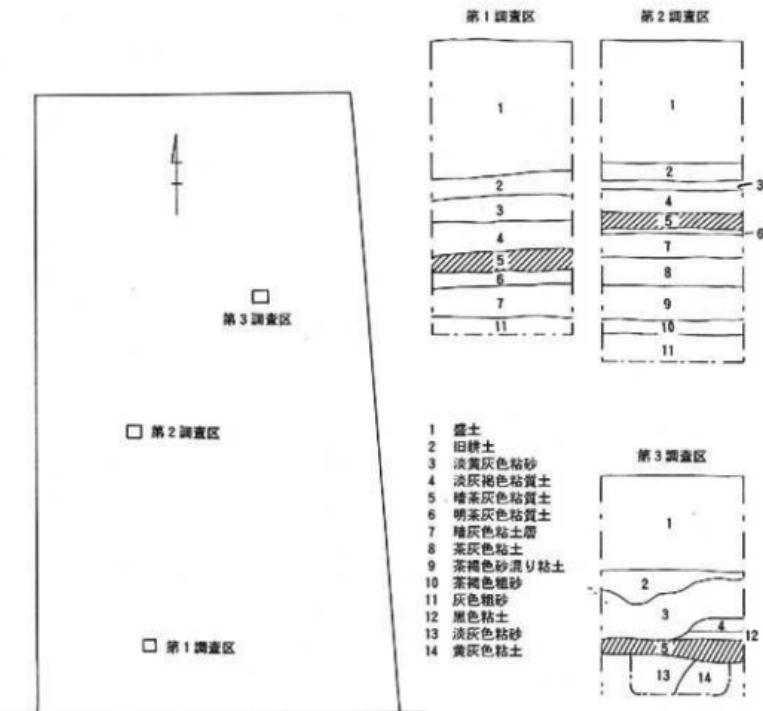
## 19. 八尾南遺跡（94-125）の調査

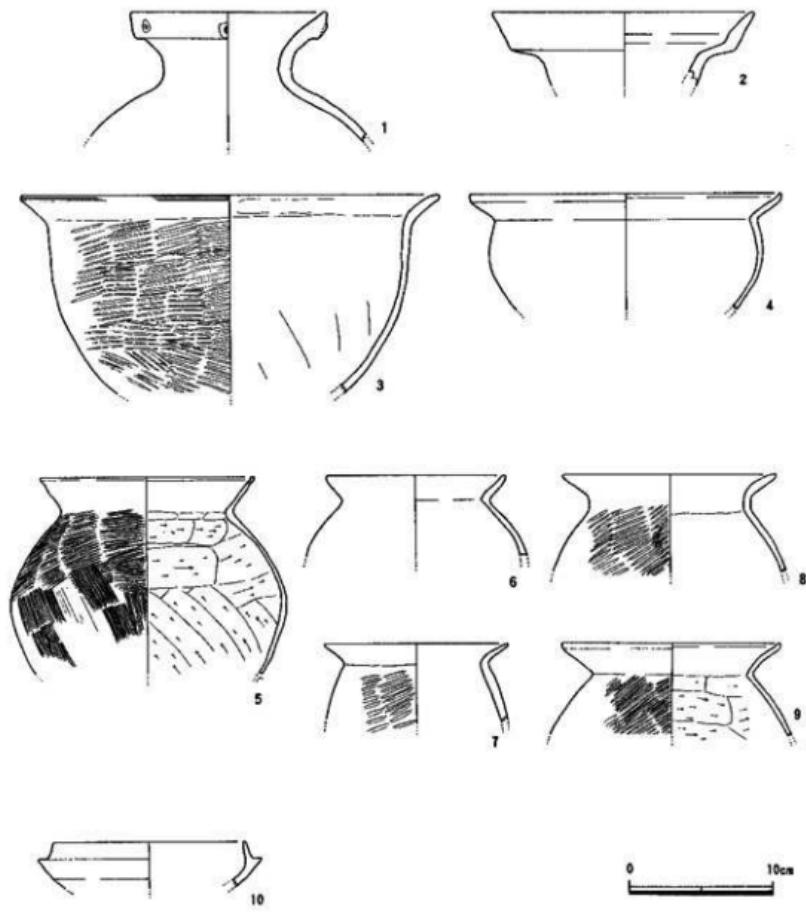
1. 調査地 若林町2丁目10~21
2. 調査期間 平成6年6月7日
3. 調査方法 開発工事に先立ち造構・造物の有無を確認する目的で、掘削可能箇所3箇所に2m四方の調査区を設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施した。その後写真撮影及び断面実測を行った
4. 調査概要 南西側第1調査区で、機械で地表下2mまで掘削し精査したところ、地表下1.5m以下に土師器片・須恵器片を若干包含している暗灰褐色粘質土層を確認した。さらに、その北側の敷地西中央付近に第2調査区を掘削し、第1調査区で確認した包含層に対応する土層を検索したところ、地表下1.2m以下に僅かに土師器片を含む粘質土層を確認した。さらに、北東側の第3調査区を掘削したところ地表下1.1~1.3mの間の暗茶褐色粘土層内に古式土師器が多量に包含する層を検出した為、遺物の包含状況を確認しながら慎重に遺物の取り上げを行った。



第78図 調査地周辺図 (1/5000)

5. 調査結果 八尾南遺跡は、古墳時代を中心に旧石器時代～平安時代にいたるまで長期間にわたり営まれた複合集落遺跡である。今回の調査でも各調査区において古墳時代の土器を含む土層の存在を確認した。とりわけ第3調査区で確認した包含層は、庄内式の古式土師器を多量に含んでおり、調査地の北方の地下鉄工事や下水道工事の際に検出された同時期の集落跡の延長部分に当たっている可能性が想定される。本調査で確認した包含層は当遺跡の古墳時代の遺構の拡がりを把握する上で重要であり、さらに敷地東側から北側においても遺構の拡がりに留意する必要がある。  
(米田)

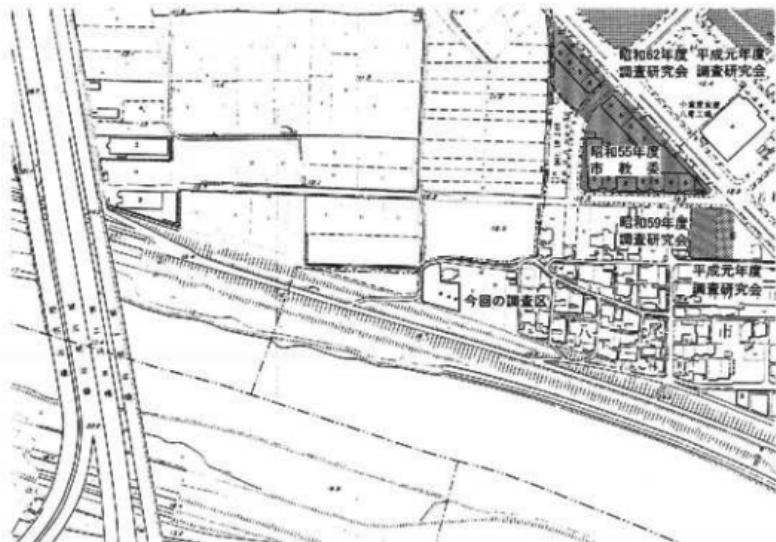




第81図 出土遺物実測図 (1/4) (1～9 第3調査区、10第1調査区)

## 20. 八尾南遺跡（94-433）の調査

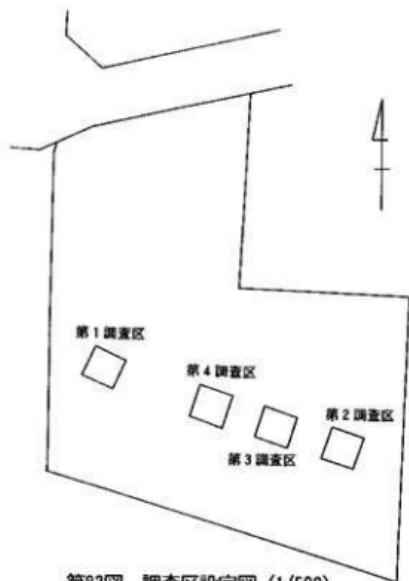
1. 調査地 若林町3丁目202-1 他2筆
2. 調査期間 平成6年12月6日
3. 調査方法 建築予定地範囲において $3 \times 3$ mの調査坑を4箇所設定した。各調査区においては、機械により表土を除去したのち手作業による掘削及び精査を行って、遺構と遺物包含層の確認及び遺物の収拾を実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 建築敷地西端の第1調査区では、地表下0.3mの黄褐色細砂層面に僅かに遺物が包含されている箇所を確認した。以下施工予定深である地表下1.4mまで掘り下げたところ、1.4mまでは細砂層と粘土が交互に堆積し、最下層で植物遺体を含む暗青灰色粘土となっていた。そこで建築敷地東端で第2調査区をあけたところ地表下0.3~0.4mで厚さ10cm以下の弥生時代後期の包含層を検出し、それを取り除くと幅40cm深さ20cmの溝を検出した。そこで、包含層の範囲を確認するため第1調査区との間に第3・第4調査区を



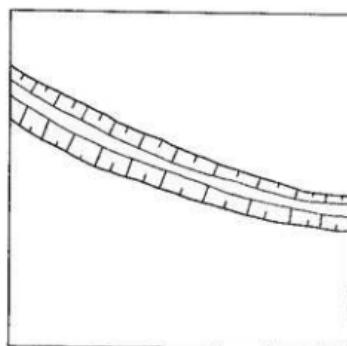
第82図 調査地周辺図 (1/5000)

設定したところ第3調査区でやや濃密な遺物包含層を確認した。

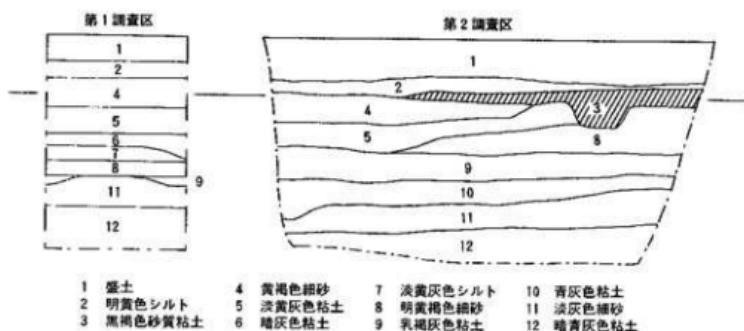
5. 調査結果 調査で確認した包含層と遺構は、西の隣接地の財大阪市文化財協会による発掘調査で確認されている弥生時代～古墳時代の集落の遺構面（長原8A層）に対応するものであり、関連する遺構の存在が想定できる。（米田）



第83図 調査区設定図 (1/500)



第84図 第2調査区平面図 (1/50)



第85図 土層断面図 (1/40)

## 21. 山賀遺跡（94-396）の調査

1. 調査地 山賀町4丁目34-1, 35-1
2. 調査期間 平成6年10月11・16日
3. 調査方法 開発予定地範囲において $3 \times 3\text{m}$ の調査区を5箇所設定した。各調査区においては、機械により盛土を除去したのち、機械及び手作業による調査を行い、遺構と遺物包含層の確認及び遺物の收拾を実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。
4. 調査概要 敷地東端の第1調査区においては、地表下3.8mまで掘削を実施したが、旧耕土・床土以下は粘土が厚く堆積するのみで、最下層で湧水砂層に当たり遺構・遺物の存在を確認することができなかった。敷地中央北西側に設定した第2調査区では、地表下3.5mまで掘削したところ、旧耕土・床土以下に第1調査区同様粘土の厚い堆積がみられたが、最下層の地表下3.1m以下に存在する黒灰色粘砂層より弥生時代前期の弥生式土器の破片や石器が多数包含されているを確認した。この包含層の厚さは約50cmと推定される。敷

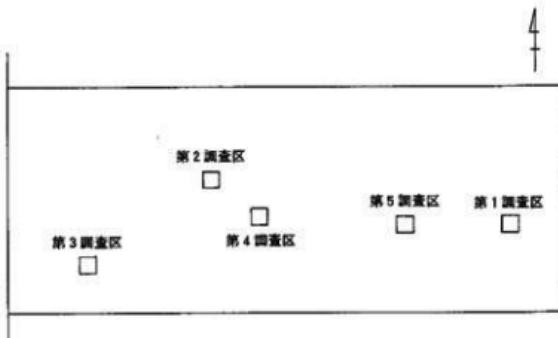


第86図 調査地周辺図 (1/5000)

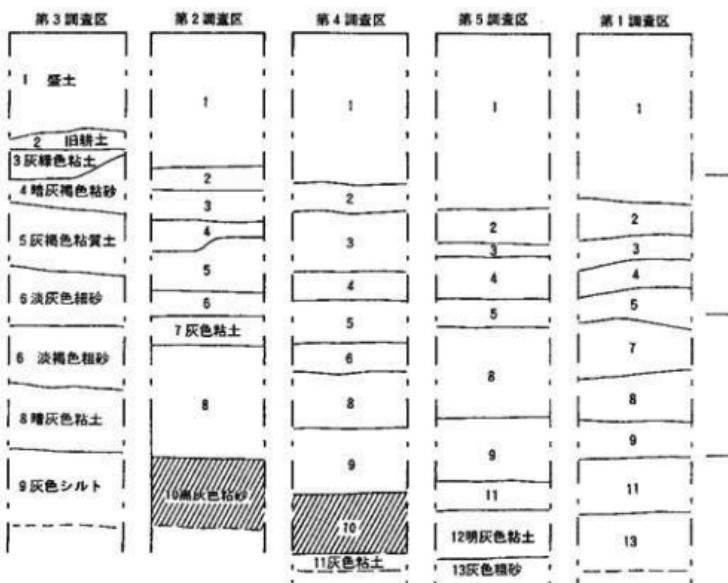
地西端で設定した第3調査区では、地表下1.7m以下が湧水が多い砂層となり、3.5mまで掘削を行ったが第2調査区でみられた包含層の存在を確認することができなかった。

そこで、包含層の存在範囲を確定するため、第4・5調査区を第1調査区と第2調査区の間に設定し、地表下3.8mまで掘削を行ったところ第2調査区に近い第4調査区でも地表下3.3m以下層厚50cmの黒灰色粘砂層より多数の弥生時代前期の土器の出土をみた。

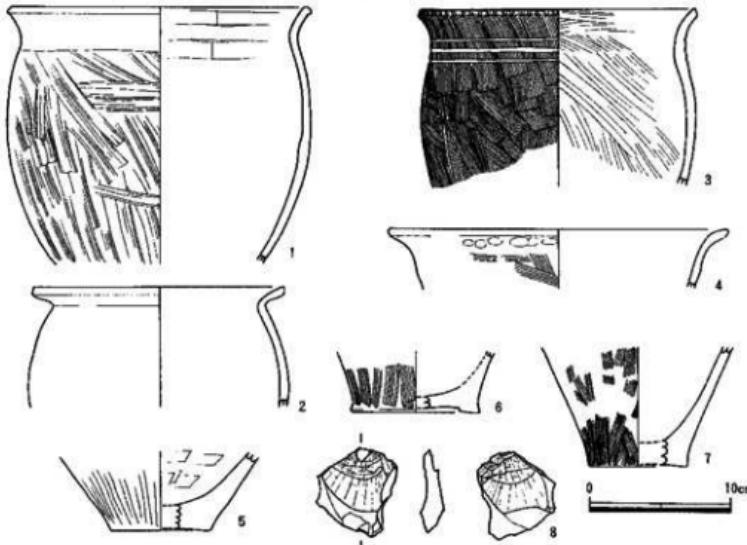
5. 調査結果 第2・4調査区でみられた弥生時代前期の遺物包含層には、弥生時代集落である山賀遺跡を象徴する弥生時代の遺物が含まれており、何らかの遺構の存在を示唆するものである。ただし、第1・3調査区の砂の堆積は、河川跡の存在を示すものであり遺構の存在は想定し難い。したがって事業実施にあたっては第2・4調査区付近を中心に存在する遺物包含層を対象とした記録保存等の処置を講ずる必要がある。  
(米田)



第87図 調査区設定図 (1/1000)



第88図 土層断面図 (1/40)



第89図 出土遺物実測図 (1/4)

## 22. 山賀遺跡（94-401）の調査

### 1. 調査地

泉町2丁目～山賀町4丁目

### 2. 調査期間

平成6年11月16・17日

### 3. 調査方法

建築予定地範囲において $3 \times 3\text{ m}$ の調査区を3箇所設定した。各調査区においては、機械により盛土を除去したのち機械及び手作業による掘削作業を行い、遺構と遺物包含層の確認及び遺物の收拾を実施した。その後掘削の断面を精査し、写真撮影及び断面実測を行った。

### 4. 調査概要

建築敷地東南の第1調査区では、旧耕土以下は粘土が厚く堆積しているが3.2m付近で淡灰色粗砂層にあたり激しい湧水をみた。第2調査区においては、地表下1.3m前後の淡灰褐色粘質土層で厚さ40cmの古墳時代～平安時代の遺物包含層を確認した。包含層上層では、3条の素掘り溝を検出した。第3調査区では、第2調査区の包含層対応層で3条の素掘り溝を検出したが古墳時代と考えられる砥石が出土したほかに遺物の包含は比較的稀少であった。



第90図 調査地周辺図 (1/5000)

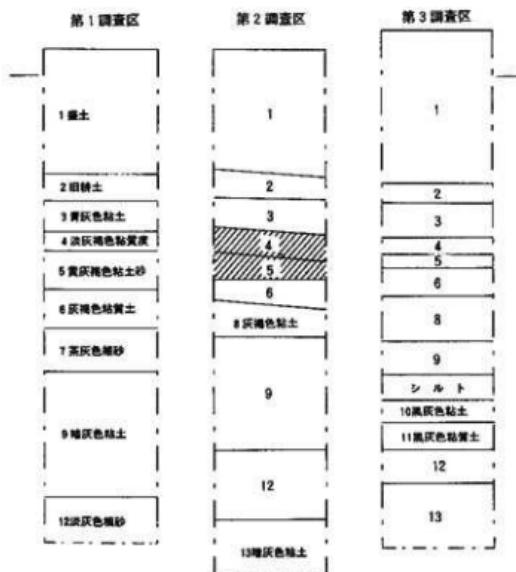
## 5. 調査結果

本調査地では、第2調査区で包含層及び素掘り溝を、第3調査区で素掘り溝を検出した。遺構については、遺物が稀少であることから中世以前の耕作に伴うものと判断されるが、性格については不明である。本調査地は、西郡廃寺にも近接し、近くの調査でも古墳時代の遺構が検出されているため、本地区で検出した遺構・遺物についても注目されよう。

(米田)



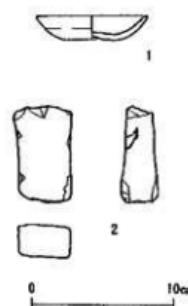
第91図 調査区設定図 (1/1000)



第92図 土層断面図 (1/40)



第93図 調査区平面図



第94図 出土遺物実測図 (1/4)

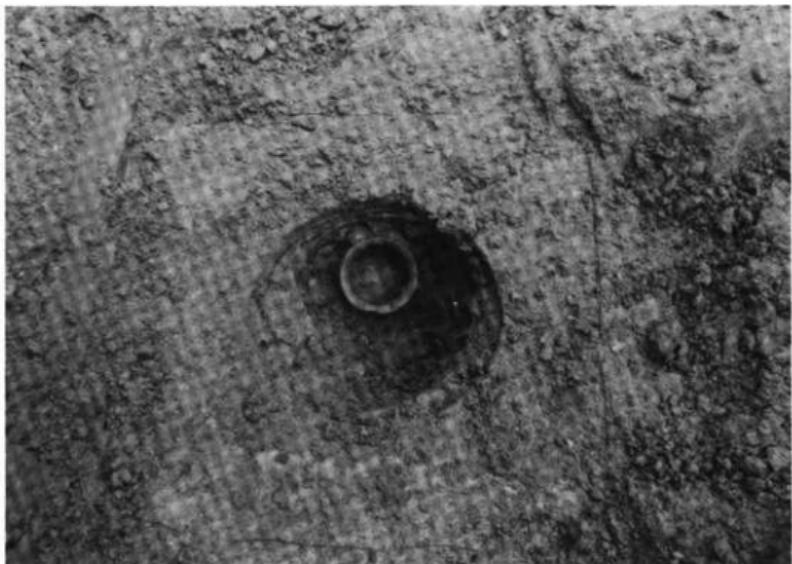
# 報告書抄録

ふりがな	八尾市内遺跡平成6年度実態調査報告書							
書名	八尾市内遺跡平成6年度実態調査報告書							
副書名	平成6年度国庫補助事業							
巻次								
シリーズ名	八尾市文化財調査報告							
シリーズ番号	31							
編著者名	米田敏幸・猪森・吉田野乃							
編集機関	八尾市教育委員会							
所在地	〒521 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎ 0729-91-3881							
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日							
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
		市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
木の本遺跡	木の本	27212		34° 13' 35"	36° 20' 30"	199404	9	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
水の本遺跡	水の本	27212				19940620	18	倉庫建設に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	久宝寺	27212		34° 13' 35"	36° 20' 30"	19940510	18	配達センター建設に伴う遺構確認調査
						19940908, 19941017	16	工場建設に伴う遺構確認調査
成仏寺遺跡	成仏寺	27212		34° 13' 35"	36° 20' 45"	19931206~ 19931207	18	社会福祉施設建設に伴う遺構確認調査
						19940112, 19940715	22, 18	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
						19940824~ 19940826	63	店舗建設に伴う遺構確認調査
高安古墳群	高安古墳群	27212		34° 13' 35"	36° 25"	19940108	16	宅地造成に伴う遺構確認調査
更造遺跡	更造	27212		34° 13' 35"	36° 25"	19940614, 19940628	18, 18	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
						19940907	12	共同住宅建設に伴う遺構確認調査

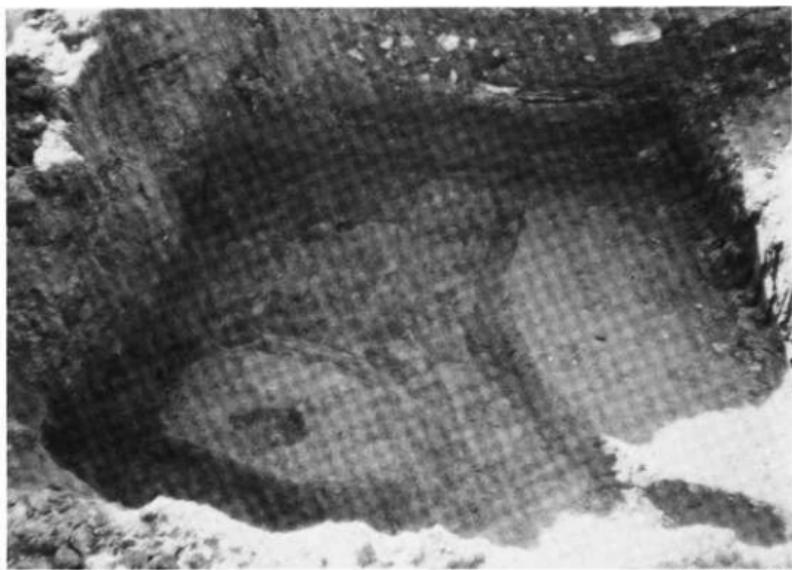
調査登録番号	調査地名	所在	コード 市町村・道路番号	北緯 度 東經 度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
							北緯 度 東經 度	北緯 度 東經 度
85041-001 中田遺跡	中田 八尾市	中田 八尾市木本	27212	34° 36' 45"	135° 37' 10"	19940314	18. 75	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
				34° 36' 25"	135° 37' 05"	19940513	1.8	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
						19940912	9. 23	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
85041-002 更弓町遺跡	更弓町 八尾市	八尾木	27212	34° 36' 00"	135° 37' 25"	19941202	9	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
85041-003 八尾寺内町遺跡	中田 八尾市	中田 八尾市本町	27212	34° 36' 00"	135° 37' 25"	19940516	1.8	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
85041-004 八尾南遺跡	八尾市	岩井町	27212	34° 35' 30"	135° 35' 10"	19940607	1.2	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
						19941206	3.6	住宅建設に伴う遺構確認調査
85041-005 山賀遺跡	中田 八尾市	山賀町	27212	34° 38' 40"	135° 36' 15"	19941011	4.5	寮、工場建設に伴う遺構確認調査
						19941026		
						19941116～ 19941117	2.7	電気工事に伴う遺構確認調査
調査登録番号	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
文昭遺跡	集落	古墳時代	講	土師器				
	集落	奈良時代	包含層	須恵器 土師器				
木の本遺跡	集落	古墳時代	包含層	輪式系土器 布雷式土器				
久宝寺遺跡	集落	古墳時代	包含層					
	集落	古墳時代	包含層					
	集落	古墳時代	包含層					
成法寺遺跡	集落	平安～ 鎌倉時代	井戸 土壙 溝	瓦器 樹 土師器				
	集落	平安初期～ 平成時代初期	井戸	埴輪 弥生土器 須恵器				
	集落	平安時代初期	溝状遺構	占式土器				
	集落	弥生時代	包含層	弥生式土器 石器				
高安古墳群	古墳群	奈良～ 平安時代	包含層					
東堀遺跡	集落	古墳～ 鎌倉時代	土壙 柱穴	須恵器 土師器 瓦器				
	集落	古墳～ 奈良時代	小穴	須恵器 土師器				
	集落	近世	溝状遺構	瓦 陶磁器				
中田遺跡	集落	弥生～ 鎌倉時代	ピット 土壙	須恵器 土師器				
	集落	鎌倉時代	溝状遺構	瓦器 十脚器				
	集落	古墳時代	包含層	占式土器				
東円削遺跡	尋覓？	平安時代	溝	須恵器 土師器 軒丸瓦 平瓦 製造土器				
八尾寺内町遺跡	集落	古墳時代	包含層	埴輪 土加器				東堀遺跡の包含層に相当
八尾南遺跡	集落	古墳時代	包含層	須恵器 庄内式土器				
	集落	弥生時代	溝	弥生式土器片				
山賀遺跡	集落	弥生時代	包含層	弥生式土器 石器				
	集落	奈良～ 平安時代	素掘溝	須恵器 土師器 砕石				

# 図 版

圖版 1 成法寺遺跡  
(93—521) · (93—476)



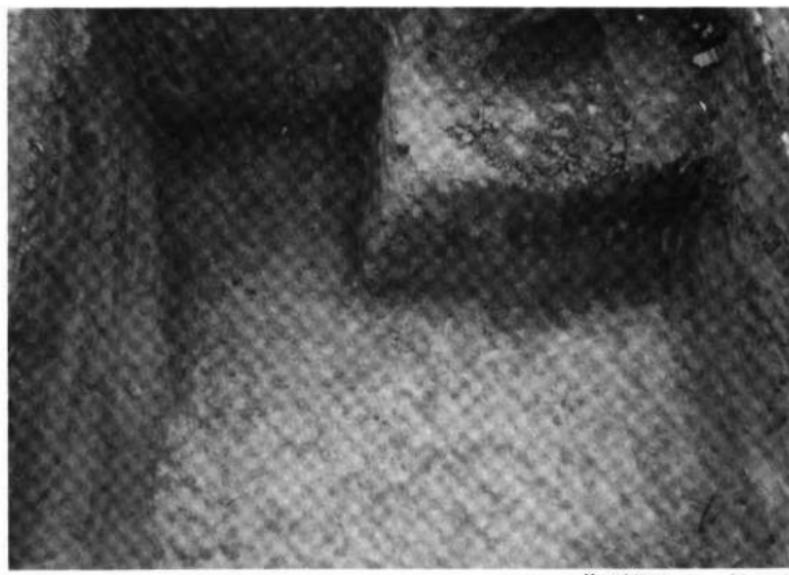
墨書人面土器出土狀況



第1調査区 溝



第2調査区 第1造構面(東より)



第2造構面 SD2(東より)



第6調査区 断面

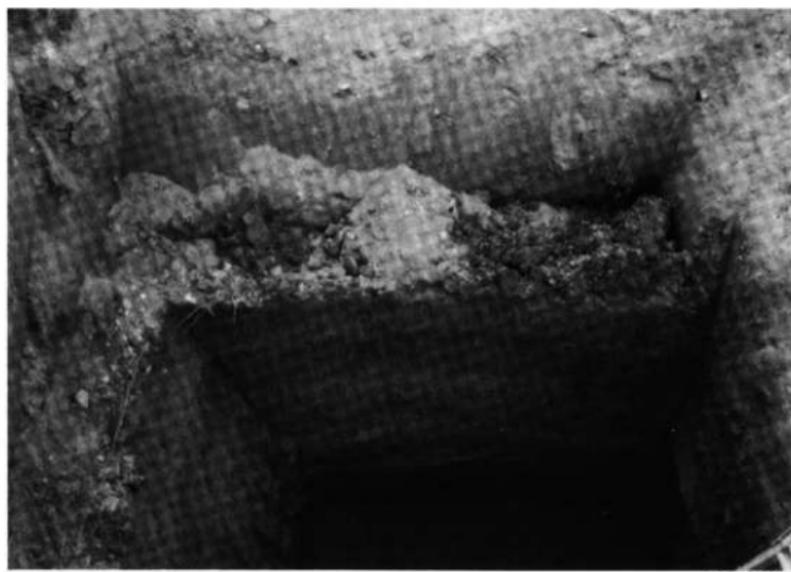


第6調査区 遺物出土状況

図版 4  
成法寺 (94—300)



第1調査区



第2調査区



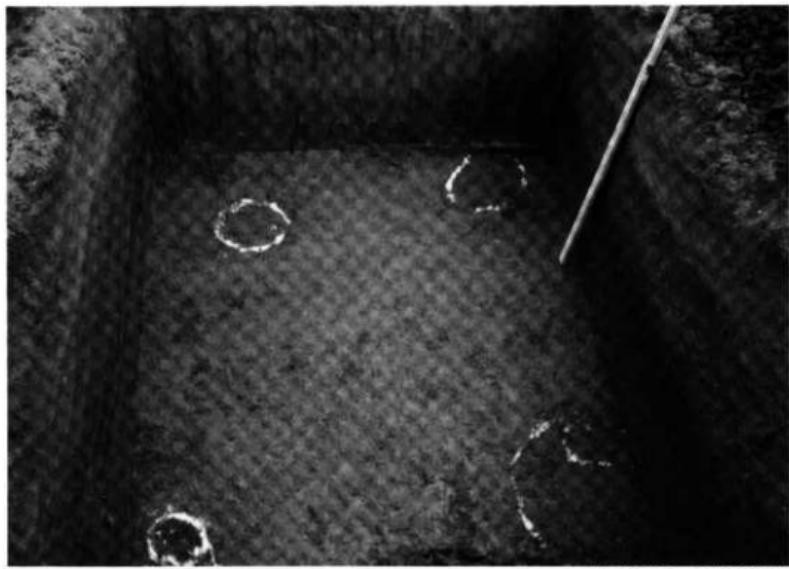
第2調査区



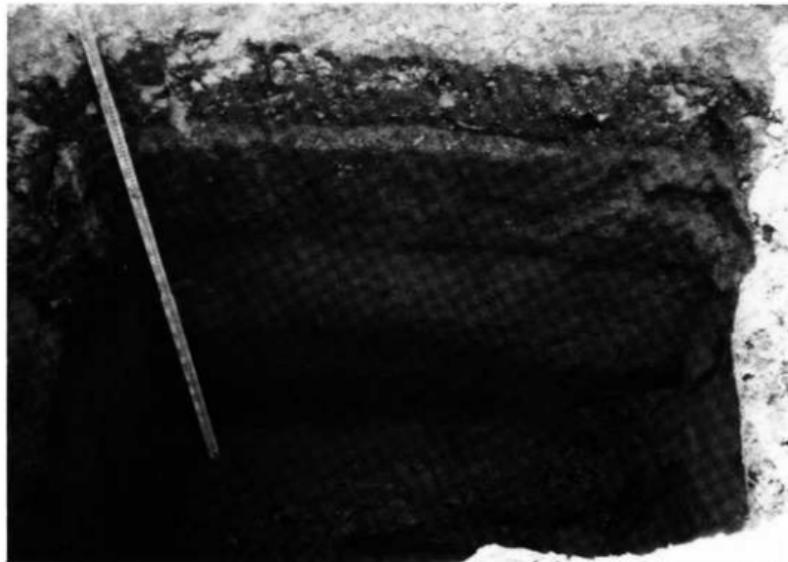
第3調査区



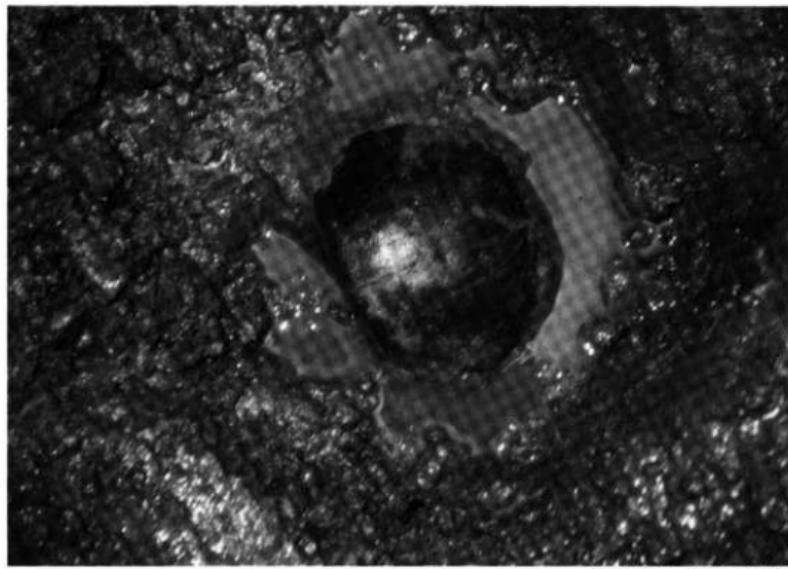
第1調査区 断面



第2調査区 遺構検出状況



第1調査区 断面



第1調査区 遺物出土状況



第3調査区 断面



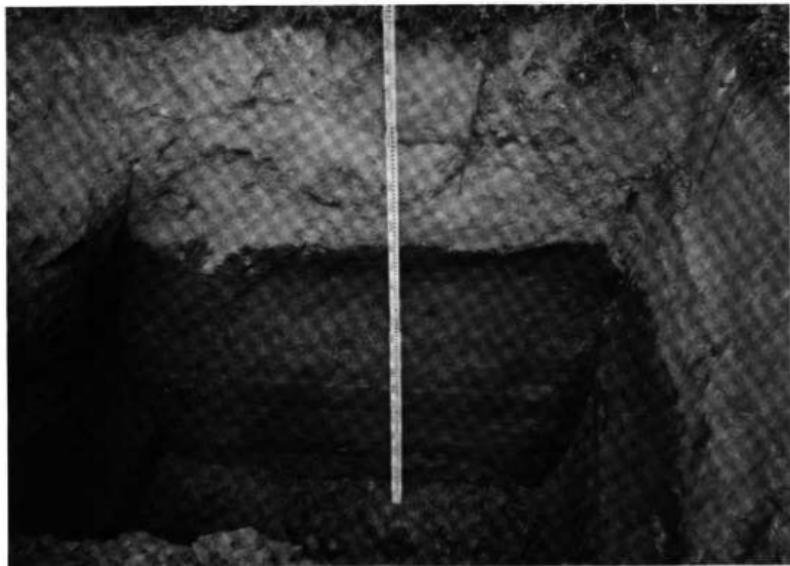
第3調査区 遺物出土状況



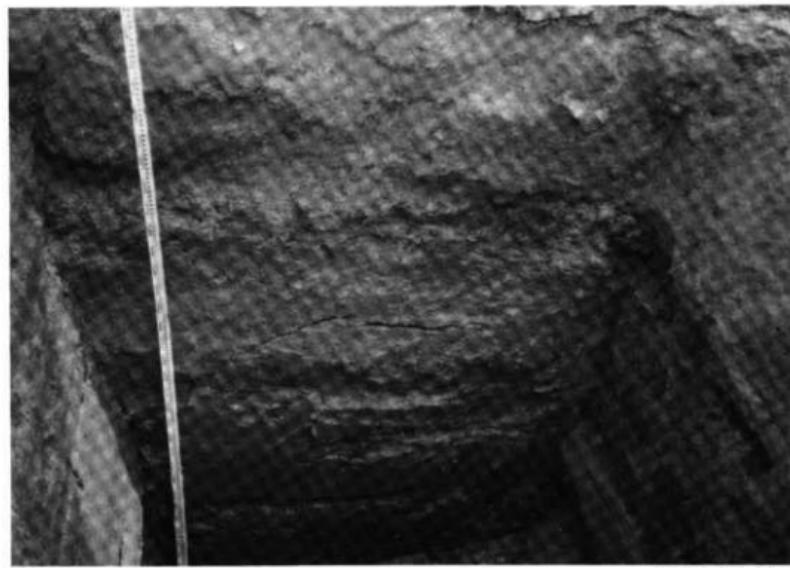
第1調査区 遺構検出状況



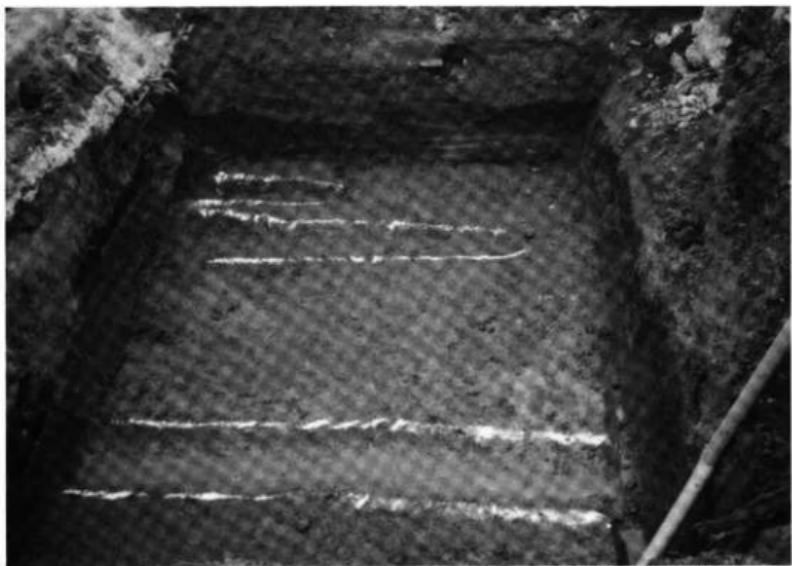
第2調査区 遺構検出状況



第1調査区 断面



第2調査区 断面



第2調査区 遺構検出状況



第3調査区 遺構検出状況

71

77

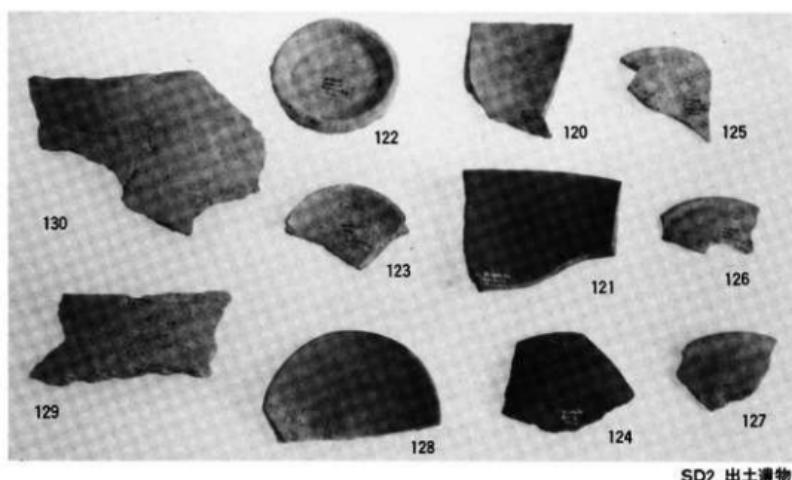
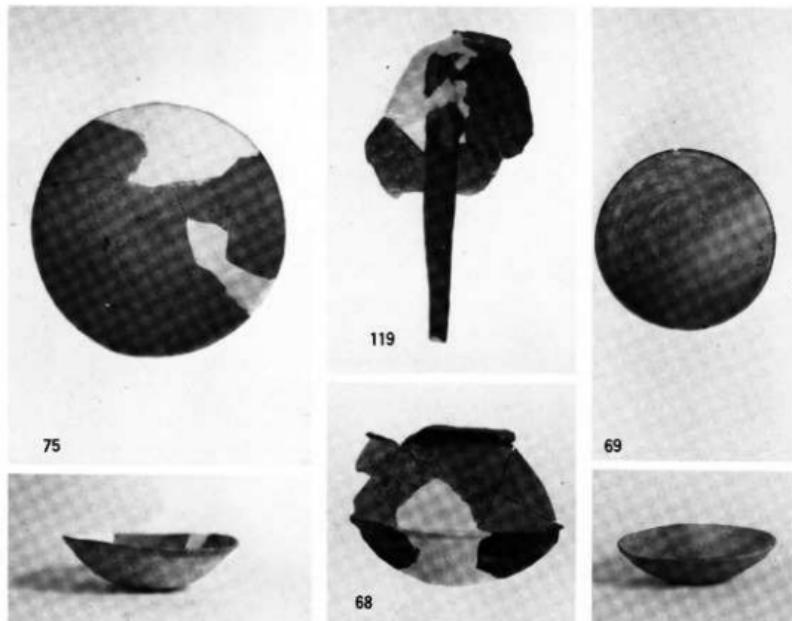
82

84

88

92

SX1 出土遺物

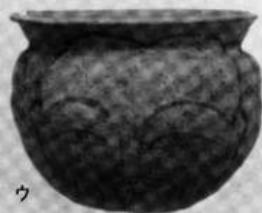




ア



イ

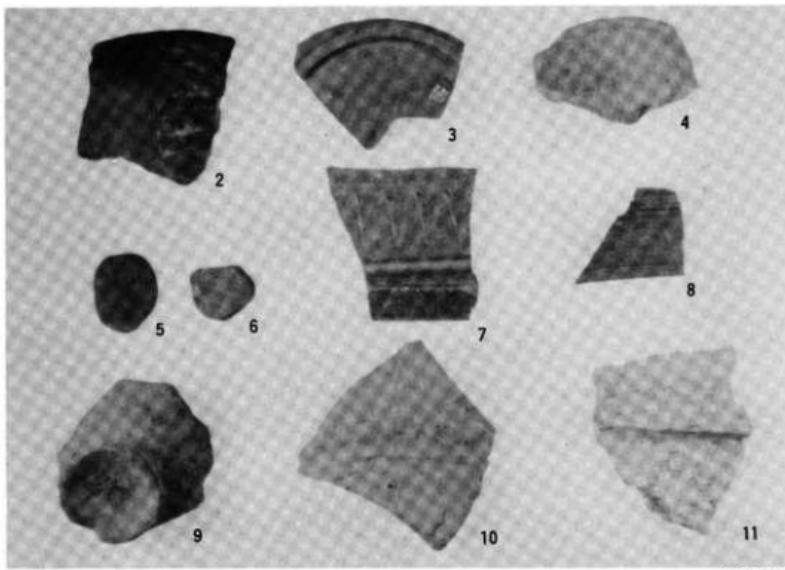


ウ

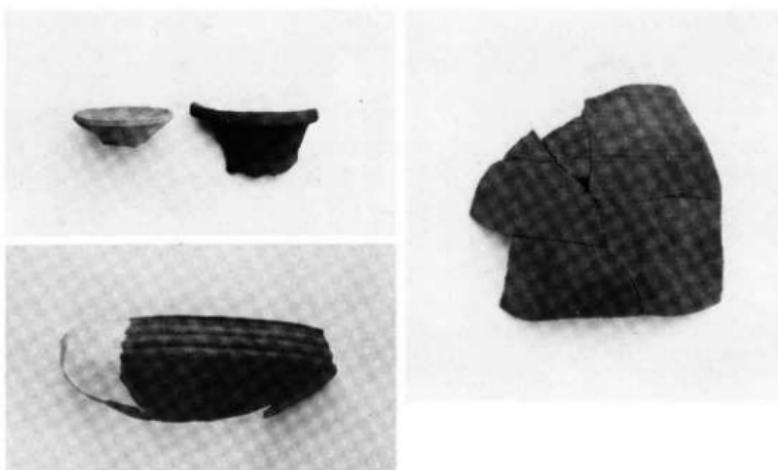


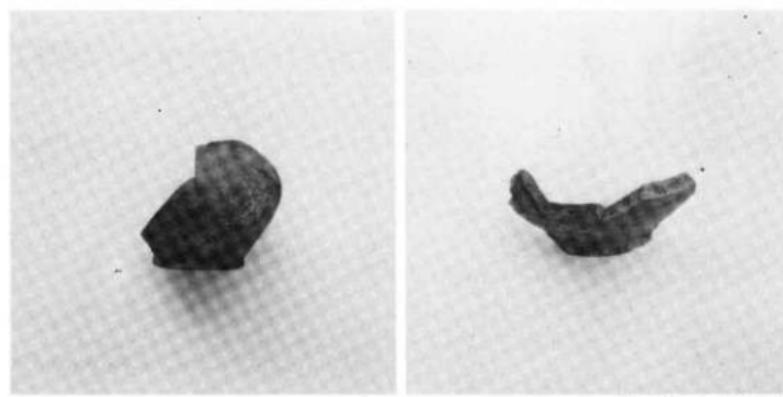
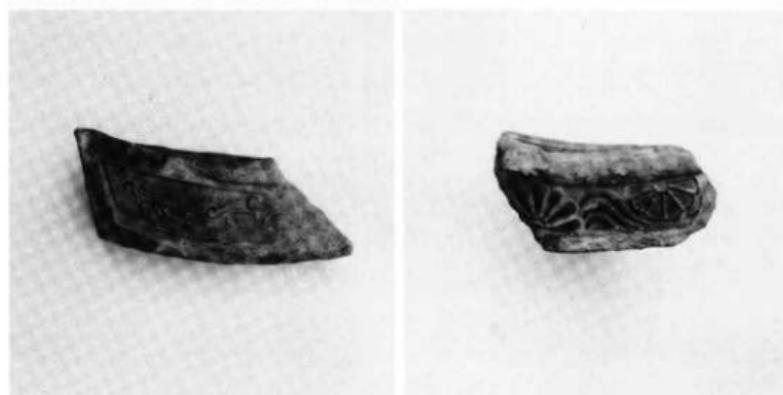
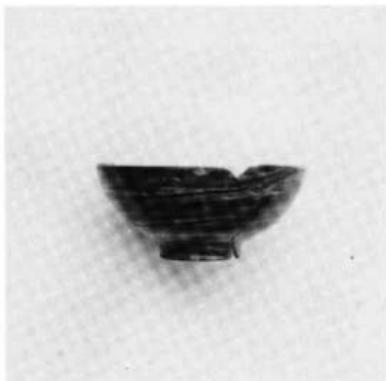
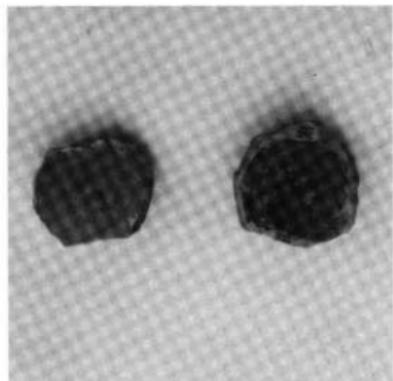
ト

墨書き人面土器

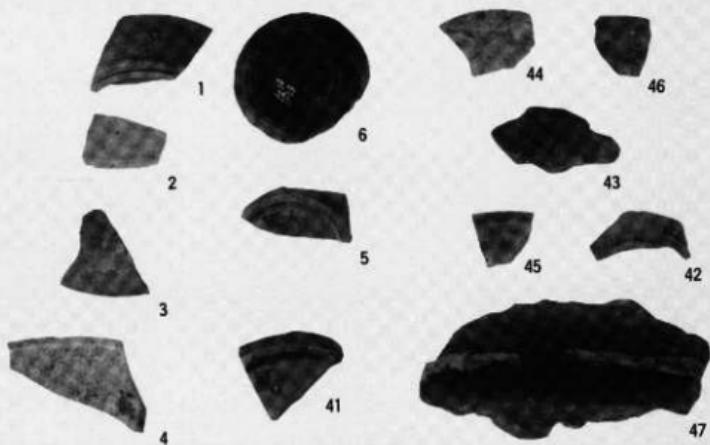


出土遺物

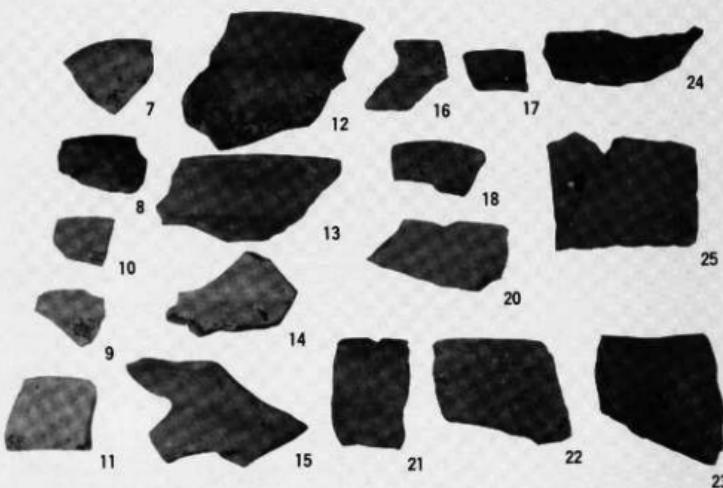




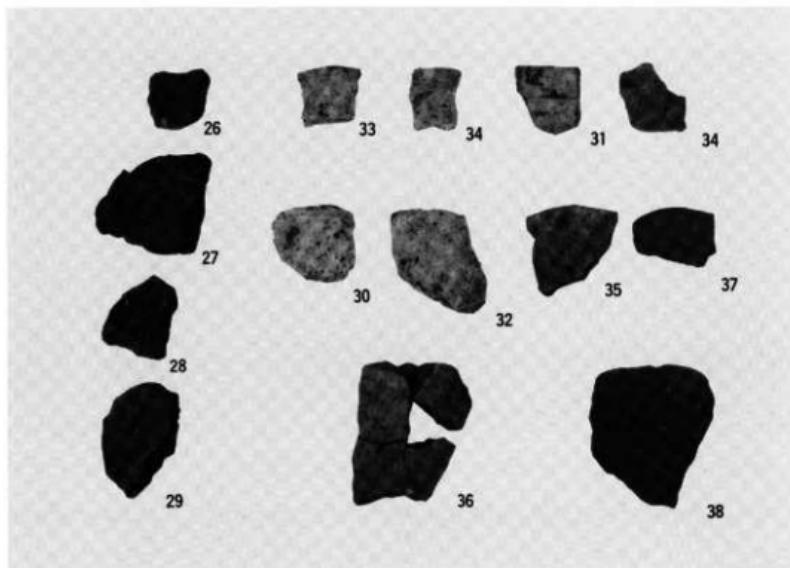
第2調査区、出土遺物



須恵器、土師器



土師器



製塙土器



中央調査区出土 軒丸瓦(49)



八尾市文化財調査報告31  
平成6年度国庫補助

八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書 I

発行日 1995年3月

発行所 八尾市教育委員会

印刷 横広野印刷

